

---

# 闇路妖狐

狐禅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇路妖狐

### 【ZPDF】

Z0786G

### 【作者名】

狐禅

### 【あらすじ】

顔が異形のものに変化してしまった少年「憂」と僧侶「華梁」との交流を描いた和風ファンタジー（微妙にバトルあり） 本作の舞台背景は「神道の影響で仏教があまり広まらなかつた日本」です。 本編は第24部からだつたりします。

薄暗い、和室の家屋の縁側に一人の男が座っていた。

一人は、奇妙な狐の面をかぶった男。いや……男と呼ぶよりは少年と言つた方がその男を表すには適した言葉のように思つ。齡にして十過ぎくらいか。顔を隠しているので、年は想像でしかない。薄い緑色の衣を羽織り、見るとは無しに中庭の方に視線をやつていた。

もう一人は、黒い法衣を着た男だ。年は少年よりも一回りは上だ  
らう。

剃髪はしていない。

整えてあるよりつで無いような、ぼさぼさと頭をしている。

男の片手には、酒の入つた丙子が握られていた。

時折、それを口に運びながら、何の気無しに庭の風景を眺めている。

夕暮れ時、辺りは夕焼けのあか色に染まっていた。

かなかなかかな

蜩の鳴き声が、他の鳴き声と覆い被さるようにして静かにこだま  
している。

昼間降つた雨のせいだろう。夏草は白玉のような水滴をつけ、き

うきりと光っていた。

「なあ、憂。」

唐突に法衣の男が狐面の少年に話しかけた。

憂と呼ばれた少年が、法衣の男の方に顔を向ける。

「人はなぜ苦しむかと言つことを考えた事があるか？」

そう、問うた。

憂は首を振った。

「人は己自身で自分を苦しめる。」

そう言つて、手に持つている杯で床をこつり、とたたいた。

「今の音、耳には残つてゐるか？」

辺りは蜩の鳴き声しか聞こえない。

憂は首を振つた。

「な？これほどはつきりしてゐる。」

憂は首をかしげた。

「つまり、この世には今しか無い。過去と言うのも未来と言うのも全て頭の中の想像でしかない。俺が杯でた床をたたいた音はたいた瞬間にもう終わつてゐる。それなのに、人は記憶してその事柄に執着する。終わつたことをいつまでも頭の中で反芻する、事実

せひこんなにまつせつとしているのにもかかわらず、だ。」

ふたたび暦縁は杯を口に運んだ。

「大切なのはありのままの自分。蜩の鳴き声は聞こじつと思わずとも耳に入る。肌は夏の暑さを感じ、庭を見せてくれる。舌は酒を飲めば酒の味がするからな」

やつまつて、憂の頭をなでた。

「この世には、苦しみは残つていないので」

「人の苦しみとこゝのは、常に頭の中にある。」

「頭の中で恼み、自分自身で、血のを苦しみてゐるのを」

「だからお前は、何も苦しまなくていいんだ。今のお前を何一つ変えむことはない」

かなかなかなかな…

蜩の声が辺りに鳴り響く。

ぱとり、と

憂の膝の上に一粒の雫がしたたり落ちた。

ぱとり

ぱとり

一つ

また一つと

憂の膝の上に染みを作つていいく。

ぽとり

一つ

ぽとり

二つ

憂の視界が、染みを作るたびにぼやけてゆく。

ぽとり

三つ

ぽとり

四つ

ああ、 そつか

ぽとり

五つ

ぽとり

六つ

これは

ぽとり

七つ

ぽとり

ぱとり  
八つ

ながく、永く忘れていた

ぱとり  
九つ

涙というやつか。

とお。

## 一話 間路妖狐

水滴がぽとりと、僕の頭の上に落ちた。  
そこで突然、僕の意識は目覚めた。

…ん、

僕は、眠っていたのだろうか。

暗い。

前方に少しだけ見える月明かりが、かわいじて辺りを見回せる程度にこの場所を照らしている。どうやらここは、どこかのぼり穴のようだ。

どうしてこんな所にいるんだったつけ？

…思い出せない。

…こや、思い出せないのではない。

これは

思い出したくないだけなのだ。

以前にも「いつこう事があった。

こやな思い出があると、僕の頭は思い出をやめよいつとか。

本当に、

本当に僕の頭は弱虫なのだ。

いやなことから逃げ出そうとして、そのくせ必死に自分を強く見せよつとする。

きつと思に出せば、また心が傷つくのだろう。

とにかく、外に出よ。

逃げよつのない現実を直視すれば、いやでも思い出すはずだ。

僕は立ち上がり、明かりの見える方へと歩き出す。

足が、痛い。  
使い過ぎたのだ。きつと。

暗く冷たい洞窟を抜け、月明かりの下へと歩み寄る。  
いやなにおいが鼻をつく。  
たとえるなら、そう

鉄の、におい。

月明かりの下には、幾人もの死体が積み上げられていた。

数は、ざつと数えて三十はある。

全ての死体が、首をかき切られるようにして死んでいた。

見覚えがある。

この傷を僕は、何度も見てきた。  
ぼやけていた記憶が、ようやくはっきりとしてくる。  
今回の山狩りの人数が、たしか三十だったはずだ。  
ここにある死体が三十。

と囁つことば、

やはじこの人たちは

僕に…殺されたのだろう。

「よお」

急に後ろから声をかけられ、思わず振り返った。

そこには手に網代傘を持った僧形の男が立っていた。  
年は二十後半位だろうか。短く切りそろえた頭に、狐のように細い目をしている。左目には刃物で切られたような傷があった。

僕は彼に以前あつたことがある。  
名前は確か、かりょう華梁、といったか。

華梁は辺りを見回し、軽くため息をついた。

「…派手にやつたな憂。」

そう言つて、ひふみい…と死体の数を数えだした。

「…二十ね。皆殺しか。…これでここにいらしてはもう住めなくなつたな。」

皆、殺し…

そうだ、この死体は僕が作ったのだ。  
それを、改めて実感する。

でも、

でも、僕は、

…何もこいつらを殺したかった訳じゃない。

「…俺は」

「おっと、言い訳はするなよ

その言葉で僕は口をつぐんだ。

「言い訳なんかして自分のやつたことを正そつとするな。ここにはお前がここつらを殺した事実しかないんだからな。お前がどんな言葉で俺の同情を買おうともやつたことは何一つ変わらないだろ。」

厳しい、言葉だ。

僕がうつむくと、華梁は再び軽いため息をついた。

「…言わすとも事情くらいわかつてゐる。ここいらがお前を化け物扱いして殺そつとしたんだろ?」

もつ四度田だからな、と小さくつぶやく。

「今度は何があった?」

何が…?

そうだ、僕は…

あのとき酒屋の主人に、

「…顔を、見られた。」

言葉を話すとずいぶんと自分がしわがれた声になつてゐる事に気がついた。

まるで、獣の声だ。

華梁は「…そつか」とつぶやき、ぽんと僕の頭の上に手を置いた。

「…歴縁さんから、お前のことを頼まれてね。しばらくお前をかくまつてやってくれだとか。」

華梁は僕の目線の高さまでしゃがみ、じっと田を見た。

「どうだ、俺の所に来るか?どうせいにせよもつこられないんだ  
るつへー」

狐の面の隙間から華梁の顔が見える。

華梁の田は片田がつぶれていが、

…その田はとても、とても澄んで見えた。

「…俺は、」

僕は

誰でもいい、

きつと暦縁さんがいない今、誰かのそばにいたかったのだ。  
小さくうなづいた。

「決まりだな。こっちだ。」

そう言つてにっこりと笑い、華梁は僕を連れて森の方へ歩き出した。

憂<sup>ゆう</sup>

それが僕の名前だった。

歳は十を数えた時からは記憶していない。僕自身、歳を数える事をそれほど重要なことだとは思っていないかった。生まれてから今まで、どれほどの時間が経過しているかを把握していくても何か得が有るとは思えない。

そもそも…僕にとって歳とは、これほどの時間、僕は生き恥をさらしてきたのだ、と。否応なしに再確認させられる…忌まわしい物でしかないのだ

それでも、十の頃までは違っていた。

…こんな言葉を使うのは用並みで恥ずかしいが、まだ夢を持つていた。

まだ、未来に希望を持っていた時期だ。

早く大人になりたいと、歳を重ねるのが喜びでもあった。

…でも、

十の終わりの頃、僕の生活に異変が起つた。

それは、普通では決して起こりえない、異常な変化。  
僕の、顔が、  
あり得ない物に、変わり始めたのだ。

その頃から、僕は他人を恐れ、忌み嫌う様になつた。

夢も無くなつた。

希望も無くなつた。

ただただ、自分の境遇を恨み、他人を恐れる様になつた。

僕だけじゃない。

他人も、僕の姿を見て恐れる様になつた。

僕の姿を見れば、人は

化物、と

そう、呼び始めたのだ。

殺そうとするものまで現れた。

災害が流行れば僕のせいにされた。

疫病が流行れば僕が原因にされた。

村人全員で、僕を殺そうとした時もあつた。

僕は、必死で逃げた。

必死で、逃げて、逃げて、逃げ隠れている内に

：ふと、声が聞こえた。

現実じゃない。

僕の内側から、その声は聞こえてくる。

初めは何を言つていいのかが分からなかつたが、

声は次第に鮮明になり、はつきりと僕の意識に訴えるよひになつて

いった。

所詮生まれた時からお前は人と相容れぬ身なのだ。

お前は何も悪くない、お前はそのような役割で生まれて来たのだからな。

ならば…悪いのはお前を殺そうとする者だ。

あちらがお前を殺そうとするのなら、お前もあちらを殺してやれ。

なに、お前はそのような力を持っている。

それが、お前の役目なのだ。

そうすれば、お前の恐怖は無くなる

声は、そう言つた。

いつしか僕はこの声に耳を傾け、

我を忘れたときに、僕はその声に体が逆らえなくなつていた。

気がつけば、僕は目の前に死体の山を作つていた。

覚えがない。

何も覚えていないのに、殺した死体の数は増えていく。

ただ後に残るのは、絶望。

いつしか僕は人と交わらぬよう、陰で生きることしか出来なくなっていた。

僕は、自らの顔を隠し、暗闇に隠れる様にして生きた。

大切な人にもらつた、狐の面をかぶりながら。

歩く」と半刻ほど、着いた先には小さな古寺があった。

苔に覆われた山門には、香泉寺と名前が書かれてある。長い間人が住んでいなかつたように、どこもかしこもぼろぼろだ。屋根の上は割れた瓦。その間から名も知れぬ雑草が生えている。はげた白壁は黒ずみ、庭はのび放題の草で覆われている。

辺りが森の木で覆われているせいか全体的にここは薄暗い。とても人の住める場所じゃないように思う。

「なに、住める場所は別に作つてある、心配しなくてもいいぞ」華梁は僕の心を見透かしたようにそう言つた。

山門をぬけ、中に入る。  
しばらく歩くと、本堂の前にぼつりと何か立つていて気がついた。

小さな、人影。

どうやら紅い衣を着た娘のようだ。

長い黒髪が特徴的な、どこか人形を思わせた、線の細い印象を受ける娘だった。

外見から見ると、歳は僕とそつ変わらなそうだ。

「涼美が出迎えてくれるとはな。何かあったのか?」涼美と呼ばれた娘は微かにうなずいた。

「お客様です華梁さん。」

娘は一言やつ置いて、そそくさと寺のなかへ入つていった。

「…相変わらず無愛想な奴だな。」

ぱりぱりとほおをかきながら、困つたように華梁はそう言つた。

「あいつもこの寺の同居人だ。訳あつて一緒に住んでる。無愛想な奴だが仲良くしてやってくれ。」

…前途多難だ。華梁と同居するのさえも惑つてしまつのに…

「ほら、じつちだ。遠慮しないで入れ。」

華梁に案内うながされ、香泉寺の中へと入つた。

もつとひどい所を想像していたのだが、中はわりかしきれいだ。畳はしつかりしているし襖や障子戸の破れが無い、寺の手入れはしつかりとしているらしい。

なるほど、確かにこれなら、住むには困らないだろう。案内されるままに廊下を歩いていくと、華梁は小さな部屋の前で立ち止まり、僕の方を振り向いた。

「すこしここで待つっていてくれ、客人に会つてくる。」

「なに、かまいやしない。そいつも一緒に部屋へ入れてくれ。俺は元々そいつに会いに来たのだ。」

部屋の中からしわがれた声が聞こえた。

「なんだ、仙人じいさんか…」

華梁はため息をつくように言つて、襖の戸を開けた。

中には、ぼろぼろの衣を身にまとつた奇妙な老人が座つていた。

白髪白鬚。何年生きているのかも分からぬ華梁の言った仙人という言葉がぴたりと言い当たる。

「おう、そいつが曆縁の言つていた憂とかいう小僧は。  
からからと笑いながら僕の方へ手招きをする。

「ほら、もつと近くへ寄つてくれんか。この年になると田がよう  
見えんのでな。」

言われるままに、老人の方へ近づいた。  
ふんと、酒臭いにおいが鼻をつく。

「ふん、奇妙ななりをしているな。狐の面か。  
どれ、と言つて素早く俺の面に手かけ、外した。  
とつたことで、なすすべもなく老人に面をはがされる。

「おい、じいさん！」

華梁が叫ぶのも気にせずに、老人はぎょろりとした目で僕の顔を見た。

ほお、と老人の口から声が漏れた。

「……こつは珍しい、狐憑きか。……いや……今まで来ると狐憑きとはいえぬなあ」

老人は顔を近づけるようにして、じろじろと僕の顔を眺める。

狐憑きか。

確かにこれは狐憑きとはもつといえない。

たとえて言つなら、

「狐そのものだな。」

そう、

僕の顔を半分は、狐のそれに変わっている。黄金色といつも白に近い獸の毛並み。

細く、鋭い目

片側だけは獸の耳が生えている。

鋭い牙

そして何より、

自分のものとも思えない獰猛な瞳が、

野に生きる狐、そのものだった。

「いや、悪かった。」

老人から面を返され、僕はそれを顔につけた。

「噂に違わぬ奇妙ななりだ。まるで人と狐の合ひの子のよくなふむ、と老人は腕を組み考へ込むように小さくなつた。」

「…お前さんのそれは確かに狐憑きの一種だよ。まあ、狐憑きつてえのは一種の呼び名で、種を明かせば只の氣ふれだがな。…要是心の病だ。それはお前さんの心がそうしたんだ。」

「…じる、が？」

ああ、そうだ。と老人が言った。

「…多分、お前さんは強い心の病を負つてている。お前自身がお前をその顔にしているんだろう。」

僕の心のせい?  
ならば、

「…これは、俺のせいなのか？」  
老人はうなずいた。

「…じーさん、言つてることは分かるけど、いくら何でも心のせいでここまで変わるものなのか？」

「変わるだらう、人は思いで死ぬこともある。病などほとんど心が関係していると言つていいから。…こここの場合はそれがずば抜けて強かつただけだらうな。」

「…治せるのか？」

「所詮心の病だ。心の病は心で治す、お前さんが変われば治ることがあるかもしだね。」

「…あなたは何ものだ?なぜ今まで俺が分からなかつたことをそ

「う易々と見抜けるのだ？」

僕がそう聞くと老人はぽりぽりとほおをかいて、困ったような顔をし「そういえば名前すらお前に言ってなかつたな…いや、失礼」と言つた。

「一応、方干といつ名だが、ここでは仙人じいさんで通つとる。仕事は… そうだな医者というのが一番近いかもしれぬな。と、いつも薬などは使わぬ。もつぱら心の病をなおしたりしている。しがないじこわんだよ。」

「医者…？」

「お前さんのそれもまた心の病、治せぬ事はない。が、それなら暦縁のもとを出す、教えを聞いているのが一番早かつたはずだ。人の悩みを取り去る」ことにかけては暦縁の右に出るものはおらぬからな。」

なぜ、暦縁のもとを去つた

「…俺がいると暦縁さんに迷惑がかかる。」

「なにがあつた？」

「ひとを、殺した。」

「ひとを？」

「ひとをたくさん。数え切れないくらいたくさん殺した。」

「なぜ」

「俺を襲つたからだ」

「なぜ」

「俺は、人と違うから、顔は狐、心は獣、人ではない、人と違う、だから殺そうとしたのだ。…人じゃないからだ。俺は」

違うな

しづかに、僕の口をふさぐように華梁がそう言った。

「人が人と違うのは当たり前だ。この世には同じものなど一つ存在しない。ひとつひとつが個別に、ひとつひとつが単体で存在している。人との違いと言うのも単なる思いでしかないのさ、何かと比較することによつて生まれるもののが優越感や劣等感。…基準もないのに、そんなものを頭で作り出してお前は苦しんでいるだけだ。」

「

それは、かつて曆縁に言われたことと同じ言葉。

自分で自分自身を苦しめているだけさ

そう、彼は言ったのだ。

でもどうしても僕にはそれが分からなかつた。

僕の見た目が

僕の顔が

僕の振るまいが

僕の心が

生まれたときから悪いとしか思えないのだ。

## 五話 方千

「……なるほど」

ほんの少しの沈黙のあと、方千が口を開いた。

「曆縁が華梁にお前を預けた理由が分かつた気がするな」

「……え？」

「憂と言つたか。」

「……ああ」

「すこし華梁の仕事の手伝いをして見ひ。」

「仕事の？」

「そうだ。のう、かまわんな華梁？」

「……まあ仙人じいさんがそう言つなら。丁度人手もほしかつた所だからな。」

「よし、決まりだ。」

そつまつと方千はよいしょと、声を出し立ち上がつた。

「さて、わしは帰るとするかの。……それから、わしのことは仙人じいさんでよいぞ」

縁側から中庭の方へと歩き出した。

ちらり、と振り向く

「…お前さんの心は読みやすいの、もっと素直になればよいのこ、  
のお「僕」？」

ふお

ふお

方千は高笑いした。

「後は頼んだぞ華梁。」

「… どうがいいな、と華梁はつぶやいた。

そのとき、強いつむじ風が吹いた。

思わず顔をそらす。

風が止み、もう一度向き直ると、方千の姿は無かった。

「… 何者なのだ、あの人は？」

「…俺も詳しくはないがね、昔仙術を極めたって聞いているが、  
まあ、謎のじいさんだよ。」

「…人の心が見えるのか？」

「まさか、そりや無理だ。いくら見えたところで人の心なんか確  
かめようが無いからな。確証がないものは單なる想像でしかない。」

…まあ、読心術の一種だよ、じいさんがやつるのは。確かに、じいさんは多少神がかつてているけどな。」

読心術、か。

でも確かにあの人は、

僕のことを「僕」と言った。

僕が自分のことを「俺」と言つてるのは強がりだ。単なる見栄、外側だけは強く見せようとしているだけのことだ。

それを、華梁の言つ「読心術」で読んだと言つのか。

それは…いくら何でも、不可能だろ？。

僕は読心術というものはどう言つものかは分からぬけれど、そこまで読めるのであればそれはもう、人の心が見えているの情緒ではないか。

方千：仙人じいさんか。

暦縁さんとどういう関係の人なのだろうか。

「ほら、行くぞ憂」

突然、華梁がそう言った

「行くって、何処へ？」

「何処って、決まっているだろ？。」

お前の殺した死体の所へだよ。

「…は？」

僕の言葉を待たずこ、華梁は僕の手を無理矢理引いて、再び森の方へと歩き出した。

## 六話 欠落

「おい、何を考えてる…」

「何を、つて？」

「何故今更あそこへ戻る必要がある?」

「何か問題があるか?」

危険だ

おそらく、他の村人に見つかる。

そうすれば、又殺される危険が出る。

そう言おうとしたとき、いきなり華梁に頬を殴られた。  
思わず、地面に倒れ込む。

「…何をするんだ?」

「痛いか?」

「当たり前だりつ?」

「だらうな。人の体ってのはそういう風に出来ていいからな。」

「…はあ?」

「痛い時には痛いと感じ、心地の良い時には心地よいと感じる。飯を食べば、飯の味がするし、音が鳴れば聞こうと思わずとも耳に入る。それほどまでに人の体ってのは便利に出来ているんだ。」

「なに、当たり前の事言つていいんだ?」

「当たり前ね。人間のその当たり前をいつも簡単に壊したのは誰だ?」

びくり

刃物を突きつけられたような感覚がした。

冷たい汗が、僕の背を這いつ。

「…後悔はしてる。が、ああしなければ俺が殺されてた。」

「何、責めるつもりは毛頭無い。憂を責めたところで死者はよみがえつたりはしないからな」

ただ、と華梁は続けた。

「悔いてはもうう。人の体とはそう簡単に壊しても良い代物ではないんだ。今のお前にはその考えが欠如しているんだよ。」

なにを

なにを言つてている?

「そんなことはない

「あるわ。」

ない

無いはずだ

そんな考えが欠如したら、

僕は本当にけだものになってしまつ。

「ふうん」

「…何が言いたい？」

「おそらくお前はこう考えたんだろ？「今行けば、いつまでも帰つてこない村人を心配した人達が探しにやつてきているかも知れない」とかさ」

「…それが、どうした

「その考え方こそが欠如している証拠だろ？死んだもののことよりも、自分のことを優先的に考えている…まあ、それが普通なのかもしけないがね。…ただ、お前は決定的に欠けている、思い出せ。あのときほら穴の中で、お前は何をしていた？」

何もしてない。

していない、と思つ。

記憶は曖昧だが、僕のことだ。

おやじらへまら六の奥で、

追っ手が来るのを恐れてがたがた震えていただけだと思つ。

「自分の殺した死体を目の前にして、だ。しかたなかつたとは言え、曲がりなりにも人を殺めている。普通なら埋めるなり一房の花くらいは供えるさ。それが正常な行為だよ。…だが、お前は何をした?」

そうだ。

身を守つて何が悪い。

僕はほら六の中で身を守つていただけ。

「だから…まさか本当に覚えてないのか?」

「おまえさ、洞窟の中ですずっと死体を殴つてたんだぜ」

は？

何を言つてこな。

そんなこと

「うそだ

「……せつぱり、氣づいて無かつたんだな

僕が、ずっと？

「俺があそこに着いたのは、本当はお前に会つてしまつ前だよ。あの場にいたら、ほら穴で物音がした。…見てみると、お前はあの死体の一つを、無心に壊していた。…無表情でな。さすがに俺も声をかけるのを躊躇つたよ。…声をかければ、俺も殺されると思った」

本当か…

本当、なのか？

まったく…覚えてない。

それが本当ならば、それは、…いつもの僕の弱さだ。

いやなことは全て忘れようとする。覚えてはいないが、そのとき

僕が何を思つてその行為を行つていたかは容易に想像が出来る。

きっと

報復が、怖かったのだ。

普通は首を潰せば終わりだ、息の根を止められる。報復などあらうはずがない。

ただ、僕の場合は違つ

うでが残つていれば、腕だけでも報復に来るかもしだいと、そう思つてしまふのだ。

冷静に考えれば絶対にそんなことは無い。

ただ、恐怖が僕の冷静さを無くす

足があれば足が報復に来ると恐怖する。

上半身が残つていれば、這つても仕返しに来るかもしだい。

恨みがましい顔が怖いのだ。

なら腕を壊せ

足を壊せ

顔を潰せ

耳をちぎれ

鼻をもげ

そうしていふ内に、

全部壊してしまったのだと思つ。

確かに、人間のやることではない。  
けだもの所行、否、それ以上。

そんなものは鬼の所行だ。

己の恐怖のままに身を投げ、死体を殴つていたんだ。  
理性なんて欠片もあつたもんじやない。

僕は。

けだものに…

「おい」

其所まで考えたところで急に華梁に声をかけられた。

「思い詰めるんじゃない。お前のそれは今までの出来事がきっかけで起こつた、単なる欠落でしかない。何もお前が人の心を無くしてるとまでは言つていないと」

「…だが」

「だが、も、何もないさ。さつきも言つた通り、自分をどう評価しようが、死者は生き返らない。…俺が見せたかったのはあれだ。」

見ると、洞窟の前にはたくさんの人だかりが出来ていた。

ただその人達は、報復が目的で来た訳では無いことは一目瞭然だ

つた。

死体にすがる小さな女の子

足のが動かないのに、死体の方へ這おうとする老婆

必死に死体を抱き起こし、母の名を呼びかける男の子。

死体を見て涙する老人

父の死体を探し回る子供を抱えた母親

およそ、僕を殺しに来たとは思えない。

人々は一様に、瞳に涙をうかべていた。

「…分かるだろ、憂。いや、分かっていたはずだ。人を殺せば必ず悲しむ人がいる。お前はそれに目を背け続けていたんだよ。」

じつと、僕はそれを見た。

「…所詮この世つてものは、我が身の外でしか起こらない。だからお前は自分で自分の罪を、自分で中で悔いる事しかできない。…知るんだ。目を背けるな。お前のやつたことは、ああいうことなんだよ」

人々は一様に涙を浮かべている。

僕は、顔を伏せた。

悔いこと

罪は、感じていたのだ、何度も。僕の中で。

ただ

分からなかつた。

悲しくも思つた、罪な事をしたとも思つ。だけれど

僕も殺されかけた…と。

どうしても自分の中で、自分のやつたことをいまかわつとする感  
情が起つる。

やつぱり自分は、けだものなのだ、と。

そう、思つた。

## 飛翔 夜空を舞つ鳥の如きもの

満月の月が、煌々と輝いた夜だった。

月の光が、夜の森を明るく照らしている。  
白く明るい夜の中、鳥の如き姿をしたものが、優雅に空を舞つていた。

時にはゆらゆらとせまよにながら森へ降り  
時にはするりと高度を上げて。

まるで何かを探すよつこ、いつまでも夜の空を舞つていた。

もの悲しい。

なぜか、見る人をそう感じさせる光景だった。

月を背にしながら、僕は夜空の中を飛んでいた。

心の中は、澄みきつている。

純粹な、憎しみ。

その憎しみに対する、嫌悪、疑念、抑止力、そんなものはない。

完全なる憎しみだ。

だから心の中はとても穏やか。これからやろうとする行為に一切のためらいは無い。

そうだ。

僕は飛んでいる。

気がつけばここにいたが、確かに空の上なら奴を探しやすい。

狐を探すために、無意識のうちに空を選んだか…と、そう思えてくる。

僕の体の下には、真っ暗な夜の森がある。

空気は澄んでいる。

心地よい風が僕のほおをなでた。

うしてゆりゆりと漂つてゆる、徐々に意識が失い始めるようだ。

狐を。

狐を。

狐を、探している。

父を殺し、

母を殺した。

母は、何も関係がなかつたはずだ。

狐を、あいつを…殺そうとした訳じゃ無い。

ただ、その場にいただけなのだ。

父の事が心配で、後を追つただけだったのだ。

なのに何故。

なぜ殺した。

つ、う、と

ほおに涙がつたつた。

僕は夜空を浮遊している  
月を背にしながら。

夢を、見ていた。

誰かに体を揺すられて、眠りから田を覚ました。

辺りは暗い。まだ朝にはなりきっていない。

隙間からかすかにもれる用明かりが、部屋の中を少しだけ照りし出していた。

まだ頭がさえきっていない。今見た夢のせいなのだろうか…

…夢。

僕は、どんな夢を見ていたのだろう?

…考えてみたが、どうしても思い出す事ができない。

微かに覚えている光景も、いつの間にか僕の奥深くに沈み込む様にして、消えていった。

…まあいい。

どつせ夢の「」とある。忘れたところ「」とは、たいしたことではないだれつ。

ふと、田をやると、部屋に誰かがいる。

髪の長い、人形のような娘

そう、名前はたしか

涼美、といったか

「朝です」

静かに、辺りの風景に溶け込む様な口調でそう言った。

「華梁さんがお呼びです」

表情を変えず、口だけをかすかに動かすようにしてその言葉を発している。

なぜ、この娘はこれほどまでに表情を変えないのでだろうか。  
他の表情が想像できない。

感情と言つものが、欠落しているのだろうか…

闇夜にうつる彼女の顔は美しい。  
だが、美し過ぎる。人の作る表情じゃない。

作り物だと、そう言われた方が、すんなりと彼女を受け入れられる  
気がする。

人の形をした作り物。

…まさしく人形だ。

体を起こし、軽く頭を振った。

そんな事はない。

彼女は、人間なのだ。

見た目で人を判断するのであれば、僕の場合は化け物。

そうでは、ない。

そうではないと、信じたい。

彼女も僕もまた、人だ。

彼女は、感情の読み取れない目で、僕の方を見つめていた。

涼美は、静かに立ち上がった

「居間でお待ちです」

そう言って、音もなく部屋を出て行った。

存在が希薄な少女だ。

現実感が無いのだ。

この場にいても、まるで涼美がどこか別の場所にいるように感じてしまつ。

今僕と会話していたことも、今見た夢の続きのような気がしてくる。

心を閉ざしている。

それが僕が感じた、彼女の印象だった。

僕は軽く伸びをして、居間に向かった。

居間では華梁が僧形に着替え、茶をすすつっていた。僕の顔を見ると「おはよっ」と言つて片手を上げた。

「悪いな、急に仕事が入ったんだ。憂も同行してもらひ

そう言つて、一気に茶を飲み干した。

「仕事?」

「そう、仕事だ。」

「仕事、か。

そう言えども、まだその仕事の内容と言つものを見ていかない。

「すぐ、出発だ。準備しろ。」

準備するものなど無い。

着物も一張羅である。寝間着も普段着も区別が無い。

「…仕事とは?」

「改めて聞かれると説明するのが難しいんだが…行きがてら教えよう。」

華梁はさつと軽くあべびをした。

## 九話 人の思い

「俺の仕事つていうのは、一言で言えば、この世に現れた「不必要なもの」を無くしてやるんだ。」

夜の森を駆けながら、華梁がそう言つた。

「不必要な、もの…とは?..」

「そうだなあ…」この世界が網の目のような関係にある。お互いがお互いを支え合い、何か欠ければ、何かが狂う。均等を保ちながら、この世界は作られている

たとえば、魚と人の関係

人は魚を食べるため殺しているが、魚の方もまた、人に食べられなければ数が増えすぎてしまう。

人は魚を必要とし、魚も人を必要としている。お互いに補い合つてこの世界に住んでいるのだ。

これは、どんなことにでも言えることだな。

植物でもいいし、動物でもいい。

ウサギだつていいし蛇だつていい。

どんな生き物でも、どんな些細な存在でも、それがいなくなれば何かしら世が狂う。

俺たちはそれを「理」と呼んでいる。

「理」は存在しているわけじゃない。

言つなれば、世の流れ。この世を混乱させないために、見えない手でこの世の均等を保とうとしてくれている。

こんな話を聞いたことがあるか？

ある生き物は、爆発的に数が増えてしまうと、自ら崖から飛び降りてその種の数を減らすそうだ。

数が増えすぎてもいけないことを、本能で知っているからだ。これもまた、理の見えざる手が働いている結果なんだろうな。

戦だつてそうだな。あれも増えすぎた人を淘汰するために理の手が働いたのかもしれない。

そのようにして、この世は成り立っているんだ。

だから、この世に存在しているものは、何一つ不必要なものはない。

分かるか？

僕は頷く。

聞いたことはあるし理屈も分かる。

「だが、その均等を崩すものがあるんだ。」

「…不必要なものなど無いのではなかつたのか？」

「その通りだ、ただし、この世に存在しているものならな。」

「それじゃあ……」

「存在しないもの……それが均等を崩しているのだ。」

「どうこう事だ？」

「存在していないはずなのに、存在するもの……それが」

人の、思いさ。

「は？」

「人は、思いで生きている、悲しいとか嬉しいとか嬉しいとか苦しいという感情も、すべて「思い」だ」

それが、

あまりに強いと、自分の内側から抜け出してしまう。

「どうこう、ことだ？」

そう聞くと、ぽりぽりと頭をかきながら「言葉で説明するのは難しい」と言った。

「実際見るのが一番早い。ほら」

そう言って、華梁の指を指した方向には

月が浮かんでいた。

大きな、丸く、白い月。  
その月を背にしながら。  
何かが浮遊していた。

「あれが、均等を崩すもの、だ。」

それは子供の姿をしていた。

顔には、白い札。

短髪に細い腕。浅黄色の衣

風に身をまかせながら、それはこちらをじっと見ていた。

「人の思いが形になつたもの。怨恨や欲望の姿だよ」

華梁は目を細めた。

「理は、あれを無くすために以前、とんでもないものをこの世に生みだしてしまつた。俺たちはそれを再び生み出さないために、人の体から抜け出た「思い」を無くしている」

僕の方を振り返った。

「…」これが、仕事だ。

怨恨  
恨み  
悲しみ

それが起ころるのは必ず原因がある。

原因とは、

何にに対しての？

否

：誰にに対しての、か。

僕はあの姿に見覚えがあつた。

あれは

僕の殺した死体を抱き起こし、泣いていた男の子だ。

## 十話 狩

ゆらゆらと、月を背に浮かぶ。

僕は再び暗い森に視線を移した。

そのとき、僕の足下で、駆ける一つの影を見た。

一人は僧形の男

もう一人は、

…白い狐の面をつけている。

その二人は、いつの間にか立ち止まり、じっと僕の方を眺めていた。

にたりと、笑みがこぼれる。

…ああ、ようやく見つけた。

狐が、いた。

ゆらり、と奴の身がゆらいだ気がした。

「…まずい、見つかつたな」

華梁が言った。

「見つかつた？」

「間違いない。…つと来たぞ。構える」

見ると、さっきまで月に有つた人形の陰は、もう無くなっていた。その代わり、こちらの方に向かい、鳶のようになびいてくる人影が一つ。

人影は飛んでいた。

陽炎の「」とくおぼろげな身を翻しながら、夜の空を飛ぶ。その姿ははかなく、そして美しかった。

「あれは人の姿ではあるが、人と否なるものだ。けして見誤るな、命取りになるぞ。」

華梁が錫杖を構える。じゅりり、と音が鳴つた。

「なあ、華梁。」

「なんだ？」

「よく分からぬが、あれは人の思いが作り出したものなのだろう？」

「ああ

「原因は、俺か

華梁は少し思念したあと「…そうだ」と言った。

「ならば、あれは俺の領域か。」

僕の手で作り出した恨み。それが、形になつたもの、  
そうか、

ようやく僕にも裁いてくれるものが現れたか。

「おい、生身のお前じゃ相手にならんぞ。」

「試さなくてはわからぬ。」

それに

「あれが人では無いのなら…俺とて同じだ。」

奴との距離が迫る。

奴が、僕に触れる瞬間、

僕は、奴の頬をを薙ぎ払つた。  
爪が、肌に食い込む。

手応えが、あつた。

奴の身は前方の木に勢いよくぶち当たり、地面へ倒れ込んだ。

## 十一話 捕食

何かが僕の中でさわやかだした。

そうだ。お前はそれでいい。

お前には、力がある。

そして、お前の田の前にいるのも、だ。  
それがお前に向けられた憎しみの姿だ。  
お前の憎しみと、どちらが強い？

理性が、無くなつていいく…

ああ… そうだったな。

これが、「俺」の役目だ。

「おい。」

うずくまつてこるそれに声をかけた。

まだ子供の面影を残す小さな体。

そして顔には、

白い、札のよつなものが貼り付けられてこる。

見覚えがある。

この札は、奴の持ち物だ。

「…ずいぶんとあつけないな、俺が世を恨んだ憎しみはこんなもんじや無かつたぞ。」

それは、腕を立てゆつべつと立ち上がろつとしていた。

「来るならそれを超えるものでこゝ、でなければ、俺は裁かれぬ。」

「俺」はもう一度、腕を構え直した。

それが、飛び跳ねる。

木の丈をも超える飛躍で、再び空を舞つた。

だが、先ほどの優雅な飛行ではない。それは傷ついた鳥のように弱々しく、触れればすぐに地に落ちそうだ。

あの高さなら、落とせゐ。

「俺」は近くにあつた杉の木に足をかけ、素早く両手で自分の体を空へと押し出した。

失速するたびに、他の木でそれを行つ。

飛躍。

最後に足を蹴り出したときには、「俺」はそれよりも上空にいた。

それは、おびえた顔をしながら僕の方を仰ぎ見ていた。

少しだけ残った理性が、今の僕の姿を、客観的に眺めている。  
気づけば自然と口が曲がっていた。

嗤つているのか僕は?

なんて、醜い。

これはまるで、

狩り、だな。

そうだ…これはまるで狩りだ。  
弱つた小鳥を落とす、狐である。

「俺」は片腕でその頭を押さえ、そのまま地面へ落とした。

「…悪いなあ。お前の恨みじゃ、俺のことは殺せないみたいだ。」

地面にたたきつけられる直前、「俺」はそれの額に張つてある白い札を強引に引きはがした。現れた顔は青白く、恨みがましい目で「俺」の顔を凝視していた。

目が合ひ。

それはかすかに口元を動かし、

おかあさんと

そつまつたよつな氣がした。

地面に、落ちた。

## 十一話 ほんの少しの前進

おー、憂！

華梁の叫び声で、理性を取り戻した。

目の前には、氣を失った子供の姿。

「え、あ…？」

僕は、今

何をしていた？

僕は、右手を振り上げるような形で止まっていた。

これを振り下ろせば、田の前の子供は確実に死ぬ。経験で分かる。

この子を、殺そうとしていたのか？

じゃあ、僕は

「やめろ、もう。」

華梁がその少年の前に立はだかった。

「こいつを傷つけても何の解決にもならん。これはこいつの意思だ、

実体がない。…普通なら触れることが出来ないはずなんだがな…、まあそれはいい。とにかく、お前はまちつ手を出すな」

冷たい視線。

僕は、目をそらした。

僕は、

何をやっているのだ。

もひ、殺したくないのこ。

せつかく、曆縁さんが諭してくれたのに。

これじゃあ、何にも変わっちゃいない。

昔と回じ、…ただの獣だ。

体の力が抜け、よろよろと近くの木に寄りかかる。

華梁は、そんな僕を一瞥し、少年の方へ向き直った。

「…問題は、ここつか。…ああこりや洞穴の前にいた子供だな。それなら話は早い。」

そう言つて、華梁は立ち上がつた。

「お前は、ここで待つてみ。少し出でてくる。」

「…何処に、行くんだ?」

「こいつの実体の所へだ

と言ひ」とは、

…あの村か。

「俺も……」

「だめだ」

即答だった。

「お前は面が割れているだらう。見つかると面倒だ、家で待つてろ」

冷たく……華梁はそう言い放つた。

でも、僕はここで引き下がるわけにはいかない。

ここで引き下がれば、僕は只の人殺しなのだ。

…こいつの母親を殺したのは僕なのだ。

ならば、

ならば、せめて僕がこいつを救いたい。

…絶対に見つからない、だから連れて行ってくれ。

「…。」

華梁が僕の田をじっと見る。僕の考えをはかりかねてこらみつだ。

「…俺が、こいつの母親を殺した。」

だから、

「俺は、こいつを救う義務がある。華梁にだってそれは任せたくない。…俺の責任なんだ」

僕がそう言つと、華梁は少しだけ驚いた顔をした。

そして…心なしか表情を緩めた。

「…しようがないな。」

ため息まじりにそう言つた後、華梁は僕に背を向けた。

「…見つかるなよ。まあ、そいつの戦い方を見てると足手まといにはならんだろうがな。」

一緒に行つてもかまわないということだらう。

僕は、歩き出した華梁の後を追つた。

「…やつぱり、お前はけだものなんかじゃないぞ。」

ぽつりと、華梁がそう言つたのが聞こえた。

村では、どの家からもすすり泣く声が聞こえていた。  
外を歩く者いない。

ただただ古びた家屋の中から、故人を思ひ泣き声が聞こえてくるだけである。

僕の記憶では村はこんな所では無かつた。  
貧乏ながら活気にあふれ、威勢の良いかけ声や、子供達の笑い声が聞こえる、そんな村だったはずである。

…ここには僕が、少しだけ住んでいた村だ。一ヶ月くらいの間だったろうか。

素顔を見せることが、僕の日常を壊す原因だと知っていた僕は、ひたすらそれを隠し、平穏な日々を過ごしていた。

だが、ある日、簡単に崩れたのだ。

…今考えてみれば、軽い冗談だったのだと思う。  
良くしてくれた酒屋の主人が、僕の隙を突いて面をとつたのだ。  
きっと僕の顔に傷ややけどの痕があつて、それを隠すために面をつけてるとでも思ったのだろう。

あまり心を開かない僕を思つて：そんなもの恥ずかしがる必要は無い、と、そう言いたかったのかもしれない。

…今となつてはもう分からぬ。

結局、素顔を見られた僕は化け物扱いされた。

華梁は、家族の亡くなつた家に入り経をあげている。  
きっと、あの子の家を探すためだ。

通りがかりの僧です。この村でたくさん的人が亡くなつたと聞きました。供養のため経を上げさせていただきたいのですが

聞き慣れない「僧」と言つ言葉に、村人は首をかしげたが、華梁に悪意が無いことと、亡き人の供養をしてくれる事に感謝され、たいていの家では中に上げてもらえていた。

やはり、聞かない言葉なのだろう。僕も暦縁さんから聞き、初めて知つた言葉だつたから。

僧か。

暦縁さんに聞いた話だ、海を渡つた別の国で、日本とは全く別の考え方<sup>おしえ</sup>が説かれた教<sup>おしえ</sup>があるらしい。

「ほとけ」…とか「しゃかむにぶつ」と言われた人が説いた考え方らしいが（暦縁さん曰く、考え方ではないらしいのだが、僕はよく分からなかつた。）こちらの国では、あまり聞かない教<sup>おしえ</sup>だつた。

ここ<sup>おしえ</sup>の国で信じられている教<sup>おしえ</sup>は、もっぱら「神」が中心で、教<sup>おしえ</sup>とは「神を崇め奉る」というのが常識だつた。

それ以外の教<sup>おしえ</sup>というようなものはあまり伝わっていない。神を信じ

るか、信じないか、という一種類の人に分かれているだけである。  
(一応は、伝わっているらしいがひどく一部の人気が知っているくらいなのただそうだ)

実際に僕も、「神社」という建物は知っているが、寺という建物は暦縁さんに出会って始めて見た建造物だった。

暦縁さんからその「教」<sup>おしえ</sup>を聞いていたが、僕にはなかなか理解することが出来なかつた。結局最後まで曖昧なまま、暦縁さんのもとを離れてしまった。

首をかしげている所を見ると、村の人々も僕と同じだつたらしい。

今、華梁が家に入れてもらつているのも、人柄のおかげなのだろう。僕はといつと、もっぱら家の陰に隠れて行動していた。

村人に見つからないよつ…慎重に…

すすり泣く声を聞きたくなくて、ずっと耳をふさいでいた。

僕はまだ…自分の罪と、向き合つ事が出来ないでいるのだ。

華梁は一、三軒の家を周り、「あの子供の家が分かつた」と言つた。

「あそこの家だ。」

華梁の視線の先には、小さな茅葺きの家が建っていた。

華梁は入り口に立ち、扉を開けた。

ひどく…空気が薄く感じた

「」の家のだけ何かが禍々しく淀んでいる気がする

中には膝を抱えた浅黄色の子供がうずくまっていた。

「…だれ、ですか？」

心底、現れた人間に興味がなさそうに、それはそう<sup>軽<sup>かる</sup>い</sup>軽<sup>かる</sup>つた

「お前を、救いに来た」

おもむろに、華梁が言った。

「救い、に？」

「そうだ」

・・・。

「どうに、救いが有るといつのですか？」

「救いは、いつもお前のそばに有る。」

ふふふ

子は自らを**あはげ**わいへり躍つた。

気休めなど、必要有りません。

僕の救いは、ただこのまま眠つたように死ぬ事だけです。

望みは、ただそれだけ。

か細い声で、そう言つた。

「救いがそばに有る……その通りかもしません。」

華梁に向かい、立ち上がる。

「死は、ここにある。あなたが僕をこの場で殺してくれれば僕は救われるのです。」

さあ。

両手を、広げた。

救えるのなら、僕を救つてください。

子は瞳をゆきくじて閉じた。

「だが、今のお前を救うことは無理だな。  
ぴくり、と、肩をふるわせた。

「……どうしてですか？」

「簡単だ。お前は、救われることをあきらめているからだよ。」

「何ですって？」

「死が本当に救いだとと思うのなら、なぜお前はせつと死なないんだ？なぜうじうじと今まで膝を抱えていたんだ？」

それは、

「お前自身が、死を本当の救いだとは思っていないからだ。」

「……。」

## 十四話 求道

「それは、逃げだ。お前はこれ以上自分が苦しみたくないから。死という魅力的な概念にあこがれを抱いているだけだ。」

「・・・それの」

「何が悪いって言つんだ！！」

しん、と

辺りが静まりかえった。

「ああそうだ、これは逃げだ！僕はこれ以上苦しみたくないから、これ以上傷つくるのがつらいから・・・だから死にたいだけなんだよ！ああそうだ、そุดども！お前に何が分かる！僕には、僕にはたつた一人のお母さんだったんだ！飲んだくれでも厳しくても大好きだったお父さんだったんだ！それが・・・こんな理不尽で、こんなにあつけなく死んでしまった・・・僕が、何をした・・・何にも悪いことはしない。この苦しみも分からぬお前に」

なにが、分かる・・・

そう、つぶやくように囁いて、力尽きたように倒れ込んだ。

「何も分からんさ。俺は、お前じゃないからな。」

だから、

お前はお前自身で自分を救つて見せろ。

華梁は言い放つた。

「どうすれば・・・いい。」

「それじゃあ・・・答えを教えてやる」

華梁は大きく手を振りかぶり、

ぱあん

子の、頬を叩いた。

「・・・何を」

「これが、答えた。」

「どういう意味だ・・・?」

「これ以上の意味なんか無いさ。説明を加えればそれは全て蛇足になる。これが、救いの本当の姿だよ。」

「分からぬ・・・あんたが何を言つて居るのか・・・」

「・・・分からぬのなら、悩め。本当に救われたいのなら、考  
えろ。・・・自分自身の足で苦しみが無くなる方法を求めてみろ。悩  
むと言う行為もまた、自分自身が救われるために行とことだ。決し  
て、悪いことではない。お前が求めるのなら、俺は救いの方法を教  
えるのを拒まない。全てを包み隠さず教えよう。」

悪人でも罪人でも、

つらい人でも悲しい人でも

足が動かない人でも、目が見えない人でも、

自分に自信がない人でも、

生まれつき人より能力が劣つた人でも、

体の全てを失つてしまつた人でも、

過去に大罪を犯してしまつた人でも、

全ての人に等しく救いはある。

だから・・・

救われたければ、

本当に救われたいのであれば。

必死で、救いを求める。

香泉寺は救いの道を求めるものは拒まない。

救われたいと思ったのならば…

いつでも門をくぐり抜けろ

「香泉寺の山門は、常に開いているぞ」

そう言って、華梁はきびすを返した。

## 十五話 「時」

僕たちは、村を出て、元来た道を戻り始めた。

「なあ、華梁。」

「なんだ？」

「さつきの言つていたことは、本当なのか？」

悪人でも罪人でも、  
つらい人でも悲しい人でも、  
足が動かない人でも、目が見えない人でも、  
自分に自信がない人でも、  
生まれつき人より能力が劣つた人でも、  
体の全てを失つてしまつた人でも、  
過去に大罪を犯してしまつた人でも、

全ての人に等しく救いはある

過去に大罪を犯してしまつた人でも

それならば…

俺も…

「俺も、救われたいと思っても良いのだろうか？」

ずっと、歴縁の元でもずっと…

僕には罪悪感があった。

人を、たくさん殺したのだ。

幸せだった人もいただろう。

生きるのが楽しかった人もいただろう。

つらかった人もいただろう。

そしてそのつらさを乗り越えようと必死でもがいた人もいただろう。

僕は、その人達を、そんな人達をこの手で殺めてしまったのだ。

そんな僕が・・・そんな僕など、救いを求めるという行為すらおこがましい。

でも、それもまた、幸せになる事から目を背けた事。

自分自身で、幸せになる事を放棄している。

逃げていた、と言つことだ。

全ての人に救いが有るのなら。

僕の目の前にも、救いの道があるのかもしれない。

「…」んな俺でも…・・・救いを求めても良いのだろうか?」

救われても、良いんだろうか。

一 もちろんだ

迷うそぶりを見せず、力強く華梁がそう言った。

- 本當が? -

「本當だよ。」

「ならせよ…」

俺も、救いを求めたい。

静かに、時が流れ始める。

それは十の頃、血ら、進むことをあきらめてしまつた時間だつた。

七八

こんな僕でも救われてもいい世界があつたらしい。

「華梁」

「なんだ？」

「少しだけ・・・」ここで待つてくれないか。」

「どこへ行くんだ？」

「また、あの村へ戻つてくれる。」

救われてもいいのなら。

俺のやつた行為に、けじめをつけねばなるまい。

「そうか。」

華梁は、僕の意図を読み取つたのか、にこりと笑つた。

「行つてこい。憂。」

僕は、力強くうなずいた。

## 十六話 一筋の光明

村に、着いた。

まだ、村人のすすり泣く声は途絶えることはない。

この声が無くなる事は、あるのだろうか。

まるで、止まってしまった物語を繰り返し見ていくような・・・そんな気分になる。

物語が止まれば・・・当たり前の事だが、何度見てもその場面から先に進む事はない。

それでも、物語が進むことを望み、見続ける。

その行為意味は無いことは分かっている。

物語を進める事が出来ないのならば・・・僕らはただただそれを見続ける事しかできないのだ。

以前の僕もそうだった。

十の時、僕は先へ進むことをあきらめてしまった。

その場に・・・止まつた場所にとどまることが精一杯だったからだ。

前進するのが怖かった。

だから僕の内側の「時」を進めようとするもの達を殺し続けた。

後退するのが怖かった。

だから僕の内側の「時」を乱そぐとするもの達を殺し続けた。

臆病で、今の自分を守り続けるために人を殺した。

現実の時間は常に流れつづけている。

・・・が、

僕の内側の「時間」は十の時から止まつたままだ。

自ら、「時間」が進むのを拒んでいたのだ。

進めば、取り返しのつかない場所まで行つてしまつ、と根拠もなくそんな不安を抱えていた。

でも、それは間違つていた。

ようやくわかつた。

今の自分に固執したところで・・・残るのはただのむなしさだけ。それならば、死んでいるのと一緒にだ。

進まなければ、何も始まらないのだ。

だから、僕は

拳を、握りしめ、

大きな声で、

自分の出せる精一杯の声で、

叫んだ。

僕の行つた行為に対しての  
謝罪の、言葉だった

声がかかるまで、あやまり続けた。

嗚咽のよじに叫び続けた。

やがて、人が集まつて来る。

なんだ？お前は・・・

・・・おい。

こいつだ。

この化け物だ。

「こいつが、息子を殺したんだ。」

こいつが、お父さんを殺したんだ！

ゆるやか

よぐせのひのひよりわせかたな。

殴りつけられた。

卷之三

## 見て あの顔

・・・化け物だ。

## 化け物！

化け物だ！

化け物だ

化け物だ化け物だ

化け物だ化け物だ化け物だ化け物だ化け物だ

化け物だ化け物だ化け物だ化け物だ化け物だ化け物だばけものだば  
けものごばけものごばけもの

のだバケモノダバケモノダバケモノダ・・・

なじる

泣き叫ぶ声が聞こえる。

誰かが僕を殴りつけ、

そしてそれは次々と波紋のように広がります。

氣つけは村中の人々が僕を殴っていた。

棒で叩く人も現れた。

石を投げつけた人も現れた。

それでも……僕は、あやまち続けた。

やがて枯れた声も出なくなり、口を動かすだけとなっていた。

それで

卷之三

止めれば、自分がくじけてしまいそうだったからだ。

せつかく進み始めた時が、再び止まってしまいそうだったからだ。

気がつけば、もう夜になっていた。

やがて、僕を殴る人も減り。

周りには、人がいなくなっていた。

意識が・・・ぼやける。

がんばったな。

人の声が、聞こえた。

もう田は腫れ上がり、声の主の顔が見えない。

よく、耐えたな。

僕は、ずっと悩んでいた。

だけど、自分自身が罪を認めるのが怖くて、ずっと田を背け続けていた。

でも、それは、ただ逃げていただけだった。

まず、自分の罪は自分自身で悔いなければならない。

なあ

「僕は<sup>ぼくは</sup>

声の主に向かつて、そう尋ねた。

それは、初めて口に出した、素直な言葉。

僕は、・・・救われるために努力しても良いのだろうか。

「・・・ああ。」

救つてやる。

だから。

だから、お前は。

誰よりも、幸せになれ。

僕の頬に一筋の涙が流れた。

手を、さしのべられる。

僕はその手を強く握りしめた。

永い、闇の路のりだつたけど。  
よつやく目の前に、一筋の光が差し込んだ気がする

ふわりとした浮遊感。

暖かい、手の平の感触。

僕は声の主に抱きかかえられた。

「香泉寺へ帰るつ。」

暖かい、華梁の声だつた。

これは、夢か。

記憶は曖昧。

僕は、竹林を駆けていた。

手で、足で、獣のように地を蹴り上げながら。

これは、どれほど前の記憶だらうか。

いや、

僕の手にはもう、地を駆ける感触と、人の首を効率よくかき切る技術しか持ち合わせてはいない。となると、いつの記憶かということを探るのは問題じゃないのかもしれない。

ただ、地を蹴り、前へと進んでいた。

追っ手に追われていたのかもしれない。

それも、いつもの事だ。

ただ必死に地を蹴り走っている。

不意に、視界が開けた。

目の前にはこじんまりとした庵が立っていた。

濡縁に一人の男が座っている。

黒い、法衣を着た男。整えてあるのか無いのか分からぬぼさ頭。

「なんだ？狐か。…いや人か。」

のんびりとした口調でそう言った。

「そんな所で、なにをしてるんだ」

男は濡縁から立ち上がり、ゆっくりと歩み寄ってきた。

人の言葉など忘れてしまった頃だ。

僕はうなりながら、男を威嚇した。

「ほら、ここに来たのなら客人だ。上がって茶でも飲まないか」

そう言った。

はじめ、男が何を言ったのか分からなかつた。

客人？

上がつてこい？

けだものの僕に向かつて？

何を考えてるんだ、こいつは。

僕が、怖くないのか。

「ほら」

男が手を伸ばす。

危害が加えられると思い、僕はその手にかみついた。

男は少しだけ顔をゆがめたが、すぐにさつきの飄々とした表情に戻つた。

「…おいおい、何をしてる。お前はれっきとした人間だろ？？それ  
はけだものやることだよ。」

「…！」

人、と

男は、僕のことをそう言った。

人として、接してくれた。

僕は人と認められた。

僕は囁みついていた男の手を離した。

「お・・・・れは」

久しく忘れていた人の言葉。

「人・・・なのか?」

僕は男にそう尋ねた。

「当たり前だろ?」

男は即答した。

「さ、人となれば客人だ。客人を外に放つておくのは気が引ける。入ってくれ。うまい茶と菓子があるぞ。」

にっこりと笑つて男がそう言つた。

子供のような無邪氣な笑顔だ。

思わず頷いてしまつた。

そのとき、僕の来た方向から、一人の男がゆっくりとした足取りで現れた。

追つてきた、という様子ではない、

が

この場所は、来ようと思って来れる場所ではない。

人里から離れすぎているのだ。

しかも、

僕はこの男にも見覚えがあった。

待ち伏せ、された。

そのときはそう思つた気がする。

とつさに僕は近くの物陰に姿を隠した。

彼の顔は覚えている。こいつとは過去に、何度も会つている。

これは

とても恐ろしい、いやな思い出だ。

## 初話　思いと存在の境界

その男は黒い水干を着ていた。

「歳は若い。三十はまだ超えていないだろう。一見柔軟な顔をしている。」

「ただ、その瞳はぎらぎらとやけに印象的に僕の目に映った。」

「あなたははこの庵の主人とお見受けしますが、この辺りに変わった獣を見かけませんでしたか？」

よく通る声で水干の男が尋ねた。

「獣？」

「ええ、獣と言つても見かけは人。ただ心がけだものなのです。先も近くの村人の首をかき切つて逃亡しました。」

びくり。

背筋が凍る。

「見かけませんな。ここには私と客人しかいない。」

「…客人ですか。」

「ええ、そうです。あなたもこの庵の客人ですか？」

「いえ、私はその狐を追つて来ました。」

「ならば、おかえりください」

ぴしゃり、と法衣の男はそう言った。

「「」は招かねざるもののが来るといひではない。」

追い打ちをかけるように、法衣の男はそう叫びた。

「…ほう。」

水干の男は、挑戦的な目で、法衣の男を見た。

「…ふむ、この竹藪の庵、来たときから気になっていた。もしやあなたは歴縁というお名前ですか？」

「いかにも」

「ふむ、名高い歴縁殿がそいつのでは間違いは無いでしょ。」  
ちらの勘違いでした」

男は深々と頭を下げた。だがその態度には僕には謝る態度はみじんも感じられなかつた。

禍々しい、いやな空氣。

「…もしもそのような姿の獣を見かけたらい」一報ください。私の名は、靈元と言います。客人がいるというのにお騒がせし誠に失礼いたしました、」

では、と

不敵に笑い、靈元は踵を返した。

「ああ、それと」

思い出したかのように顔を法衣の男、曆縁に向けた。

「見つけたら間違つても関わるつとは思わない方がよろしい。あれは獸。人の心など持ち合わせてはいないので。」

「親切な忠告、感謝します」

「では」

そう言って元来た道を歩き出し、やがて暗闇に溶け込むようにしていなくなつた。

「おい、もうでてきて良いぞ。」

「…なぜ助けたのだ」

「おもしろいそうだったからな」

「は？」

「丁度話相手が欲しかつたんだ。茶もあるし手頃な菓子もあるが、話相手がいない。さて、どうしたものかと思つてた時にお前が飛び込んできたんだ。」

… それだけ？

「それだけだよ」

よく分からぬが、とんでもなく変わった人だ。

「とにかく中に入れ。着替えの衣を持ってきてやる。風呂場においてくから好きにきがえる。」

言われて気づく。

僕の姿は血だらけだった。

この姿を見ても、この人は顔色一つ変えなかつたのか？

… 何者だろうか、この人は。

「私の名前は暦縁。…ん、まあ呼びやすい呼び名で呼んで良いぞ。」

まるで僕の考えを見透かしたようにそう言つた。

「で、お前の名前は？」

暦縁さんが聞いた。

名前？

僕の…名前

何と呼ばれていたか。

けだもの。

野狐。

白蔵主。

いや、

ずっと昔、僕にはひやんと名前があったのだ。

なんと呼ばれていたか。

たしか

そう、僕の名前は。

「…憂」

小さな声で、そう言った。

## 月夜の会合

暗い森の中に一人の男が立っている

男は、月を背に飛ぶ、鳥の様なものを、じっと眺めていた。

やがて、二人の男が現れる。

僧形の姿の男と、奇妙な狐面。

狐の面をかぶつたものが、鳥の様なものを空から打ち落とした。

にたりと囁く。

やはり、楽しませてくれる。

そうつぶやいた。

二人の男が去った後、

静かに、男が鳥の様なもの前に、歩み寄った。

じつとうずくまつたその姿を眺めながら。

…お前は失敗作だなあ。

そう、言った。

お前くらいに奴を恨んで居のなら、ひょっとするといけるかと思つたんだがね。

いやはや、期待はずれだつたよ。

そつ言ひて、男は鳥の様なもの…子を蹴り飛ばした。

「ぐ、」

短くうなり、子は動かなくなつた。

男の口元が、つづりとつり上がる。

嗤つて居のだ。

「おもしろいな。恐怖といつ感情は、あそこまで狐の理性を無くすことが出来るのか。」

く

く

く。

心底可笑しそうに、声を押し殺して男が嗤つた。

黒い、水干を着た男だった。

「多少は、面白くなつそうだ。」

子は、いつの間にか消えていた。

その虚空を見つめ、男は言った。

… なあ、暦縁？

お前は、奴をどうするつもりだ？

華梁とか言つ、若造に任せ、お前は奴に何を学ばせるつもりだ？

無駄だ

無駄だ

なあ暦縁？

お前も、退屈なのだりつ？

所詮、生とは暇つぶし。

生きるとこつのは退屈そのものだ。

お前も奴を使い暇を潰したいだけなのだりつ？

なあ、暦縁？

お前はあの狐に何を求める？

何を見いだす？

無駄だ。奴は何も出来ない。人は単独では生きて行く事は出来ない。

奴は、獸でも、人でもない。

いずれ何もかもに絶望し、落ちて行くだけだ。

巨大な、憎しみと力を持ちながらな。

見てみたいとは、思わぬか？

か　　か　　か

嗤う。闇の中に男の嗤いが、こだまする。

そのとき、

…ざり。

背後で音が鳴つた。

## ひとりあるいはむのたち

「誰、ですか？」

水干の男が、ゆっくりと振り向く。

そこには、仙人のような風貌の、男が立っていた。

「なに、ただの老いぼれのじじいだ。木の上で眠つてると、妙な声が聞こえてきての。気になつて降りてきたのだ」

男は少しだけ、動搖した

気配が、無かつたのだ。

多分、音を立てたのもわざわざこちらに存在を気づかせるためだろう。

ただの老人ではない。そう思つた。

仙人：

聞いたことがある。

仙人のような風体でこの辺りに住んでいた老人。

でもあれは、

三百年近く…以前の噂だったはずだ。

…否、あれは噂ですらない。

ただの……おとぎ話だつたはず。

「で、おぬしの独り言に「暦縁」と名前がでてきたよつた気がするが？」

「こいつが、その本人なら…

「暦縁に…何か用かの？」

鋭い眼光で、老人は男を威嚇した。

…。

間違いない。

こいつは。

男は、衣を正した。

「…人の身ですらないあなたが、何故人の身をなぞ気にするのですか？」

男がそう言つと、老人はにたりと笑つた。

「…おぬしこそ、俺と同じにおいがするのよ。人の身じゃないのはお互い様だ」

そう言つて、声に出して、

ふお

ふお

ふお。

老人は、わらつた。

…もつ、間違いない。

いやな汗が男の頬を流れた。

この相手は、格が違うのだ。

「あなたなら、分かる苦しみのはずです。私たちは命の時間が長すぎるのです。これは、言つなれば娯楽。これくらいのものは…」

「たわけ」

一括された。

「我らは人には関わらぬものだ。それが我らでありそれ以上もそれ以下でもない。」

老人は厳しい口調でそう言った。

「人が人であるように、我らも我らとして生まれてきたのだ。…それ以上を求めるはお前はたちまちに消える。世は全て網の目のようにつながっているのだ。それぞれに役目がある。我らの役目は、「ただそこにいる」…これだけ。それ以上のことはするな。やればいざれ…世の理に消されるぞ」

わかつては、いるつもりだ。

網の中の中から外れれば、それは、いらぬもの。

我々が人と関われば、網の均等は崩れる。

網の均等、すなわちその網がほどけた一部分。

それは、放つておけばいざれ全てを崩す。

だから、理は

崩れる前に…それを切り取る。

つまりそれは、俺という存在が輪廻から外れてしまつと言つこと。

…だが、

それこそが俺の求めている死だ。

俺は、ただただ、死という永遠の安楽を求めているだけなのだ。

その手段を退屈しきにしているだけ。

俺は…死にたいのだ。

永遠の命などいらない。

ただ安心を、得たいだけ。

「…私は、消されても良い。私は、もう

生きるのに、飽きた。

「歴縁はな、」

唐突に、老人は男の言葉を遮った。

人の身でありながら、我々という呪を超えたのだ。

そう、言った。

「Jとはじをとなつもの

「…何ですつて？」

「千年以上生き続けている俺を、奴は諭しあつたよ。たいしたもんだ。」

「…まさか。」

「…俺もお前と同じように死を選ぼうとした事がある。Jへ最近のJの身でありながら人と関わり、理に消されようと思つたのだ。

あのとき、俺を消そうとしたのは、荒涼神と言つ妖だつた。

「…荒涼神」

聞いたことが、ある。

あれも、狐のよつに初めは人だったものが化生に変わつたもの。

荒涼神に消されそうになつた俺を、やつは救いあつたのだ。

そう、老人は続けた。

あれから、十年たつ。

まだまだ若造だった奴に、この俺は助けられた。

「あなたがいなくなつても、世に綻びが生まれますよ  
「なに、安心はいつもあなたのそばに有る。」

そう、歴縁は言つたのだ。

荒涼神も、憂と同じ、理に反したものを消すために生まれたもの。  
世の均等を保とうとして生まれたもの。

「…まさか、あの狐も荒涼神と同じと言つのですか?」

「まあ、奴はまだ迷つておるがの。あんな姿になつても、人として  
生きたいらしい。」

「ならば、奴が目覚めれば…。」

「お前が消えるか、奴が消える。当然歴縁はそれを知つてゐる。そ  
して、それを止める方法も  
な。」

「止める、方法?」

「ああ」

「いらぬ、世話だ。

俺は、生きるのに飽きた。我々は肉体が死滅する事はない。ならば、  
その理とやらに消されるのを待つしかない。

そのとおり

「…暦縁は、俺に安心をくれた。生の苦しみを取り去ってくれた。いや初めからそんなものは無かつたと気づかせてくれたとでも言つのかな」

老人は、ゆつくりとそう言つた。

呼吸が、止まる思いがした。

安心を、くれた?

出来る、はずがない。

永遠に死など無い我らの身に、安心など無い。人は死があるからこそ生きられるのだ。それはこの八百年の内に学んだこと。安心は俺が、どうしても得られなかつた事なのだ

それが、

たつた、十数年生きただけの暦縁が、得たとでも言つのか?

あり得ない。

「…嘘です」

「本当だ。」

「…あり得ない」

「本当だ」

ならば…

「ならば、俺が求め続けた八百年は何だったとこりうるだ…！」

声を、荒げた。

「俺は、それを求め続けたんだ、だが結局、永遠の生は苦しみしか生まないことを知った！だから…理から外れようとしたのだ。それ以外の方法が無かつたから…それなのに、たった十数年生きただけの糞餓鬼が、それを、得た？ふざけるな！それならば…」

俺の苦しみは、何だつたんだ？

声に、ならなかつた。

分からぬ。

分からぬ。

それは、激しい嫉妬と、虚無感。

それならば、なぜ、俺には分からなかつたのだ？

あれほど苦しみ抜いたのに。

あれほど思い悩んだのに。

それが全て無駄？

十数年生きた餓鬼にでも分かつたことが、俺には分からなかつた？

あり得ぬ。

それは、その事実は俺の八百年を…否定している。

俺は、それだけを求めていたのに。

ぐらりと、眩がした。

「…は、どのみち私は生きるには飽きたのです。」

負け惜しみのように男はそうつぶやいた。

「好きに、させてください。これは私のなりの考えがあつての行動です。」

男がそう言つと、老人は不敵に笑つた。

「まあ、俺は何もせんよ。成り行きを見届けるだけだ。何、今のはただのお節介。お前の邪魔するつもりは無いし、価値をお前に押しつける訳でも無いのでな。お前の好きにするがいいさ」

そう言つて、踵を返す。

「…俺が、今暦縁に関わっているのは十年前の後始末のためだ。華梁も同じ。そして、憂ともな。それ以外は興味ない」

つぶやくようこ、そう言った。

そして、静かに、老人はその場から立ち去った。

姿が見えなくなった後、男は地面に崩れ落ちた。

慟哭のような泣き声が、静かに、延々と夜の森に響き渡っていた。

序文

かのたき木、はひとなりぬるのか、さらに薪とならざるが、とくへ人のしめるのち、さらに生とならず。しかあるを、生の死になるといはざるは、仏法のさだまれるならひなり。このゆゑに不生といふ。死の生にならざる、法輪のさだまれる仏転なり。このゆゑに不滅といふ。

生も一時のくらゐなり。死も一時のくらゐなり。たとへば冬と春とのごとし。

冬の春となるとおもはず、春の夏となるといはぬなり。

(道元 著 正法眼蔵 現成公案より抜粋)

僕は、今が永遠に続いてほしかったのだろうか？

静かな、秋の夕暮れだつた。

香泉寺から見える風景も、少しづつ秋のそれに変わり始めている。

紅葉した葉が、ちりちりと空を舞っていた。

それが部屋の中にも幾枚か入り、ゆっくりと畳の上に落ちる。

それは少しだけ幸せな日常の風景。

僕は、最後の食材を置き、居間に向かって声をかけた。

「華梁、夕飯の支度が出来たぞ。」

「おお、すまんな。して、今日の料理は何だ？」

「焼き魚。」

「ぐ、お前は焼き魚以外の料理は出来ないのか……とか、お前の焼き魚は料理じゃない。ただの焼けた魚だよ。工夫も凝らしてないだろ……火の前に魚を置いただけだ。」

「でも、旨いだろ?」

「所々が生焼けだ。」

「セイ! が皿いんだ!」

「……つ、やつぱりお前の嗜好はわからん……。」

華梁の元へ来て一年が経つた。

この香泉寺の生活も、ようやく慣れてきた所だった。

相変わらず、この狐の面はとれないので、僕はそれなりに充実した日々を過ごしている。

朝起き、食事の準備をする。昼食までに食材を集め、料理し、夕方までにまた夕食の食材探し。開いた時間は香泉寺の掃除。それだけの日常だ。

それでも、僕には新鮮だった。

逃げるように生きていた僕にとっては、少なくとも充実した時間だつた。

ここには、ただの日常がある。

本当に・・・かけがえのない日常だ。

ここには華梁がいて涼美がいる。

この二人は、家族だ。

それは僕が十の時に無くしてしまった物だった。

「そんなこと言つても、ほら、涼美は美味しそうに食べててくれているだ。」

「いや、美味しそうと言つたか・・・思いつきり無表情なんだが・・・なぜそんなに無表情で食べられるのか不思議なくらいに。」

「それだけ、美味しいってことだわ。」

「お前のためでたいて思考もよく分からん。」

「涼美、『』いか?」

「……」

「……と無表情で頷く。

「ほひ。」

「……もしかして、俺の『』がおかしいのか?」

だが、俺は、まだ救いを求めていた。

今の日常は確かに楽しい。  
いつまでも続いて欲しいと思ひませじ。

だから、……の生活が壊れてしまつのが恐ろしかった。

「今」という物は無い、と華梁に教わった。

それは「今」と言った瞬間にすでに過去になり、そのときの今は終わってしまったからだ。

時は常に進み続け、とどまる場所が無い。

唯一、あるとすれば、それは己の頭の中だけ。

暦縁さんにも教えてもらつた。

そのときは、床を酒の杯でこつらとたたき、音を出していた。

音は、発した瞬間に全ては終わつてゐる。杯でたたいた事実もその瞬間で終わつてゐる。

世は、「杯でたたいた」という事実何一つ残してはいなければだ。

が、僕の頭の中ではその事実を覚えている。

もしもその衝撃で杯が割れれば、「元は割れていなかつた杯が床を叩いたために割れてしまつた」と思つだらう。これも間違つてはいなう。

しかし、その場には、割れた杯しか残つていのが事実だ。

「割れてはいなかつた杯があつた」という事実も、「床をたたいた」という事実も世にはまったく残つていない。ただただ割れた杯がその場に残つているだけなのにもかかわらず、頭の中で、「杯が割れてしまつた」と思つてしまつ。

人の悩みの原因もまた、それと同じだと教わつた。

いやなことば、いやなことがあつた瞬間に全て終わつてゐる。

だが、人はそれを記憶し、記憶の中で反芻する。

いやな」とがかった瞬間には、苦しみもあるだらう。

でもそれ以上の苦しみは、完全に自分自身の頭で自分自身が起ころる事だけ。

いやなことがあった瞬間は、全て終わってしまっているからだ。

華梁から聞いたとき、悩みとはたつたそれだけの事なのか、と膾すかしを食らつた。

それを華梁に話すと、

「頭で理解するだけなら、誰でも簡単に出来るや。」

大切なのは、その事実を己の中で本当に受け入れること。

それが出来なければ、こんなのはただの知識止まつや。

そつこつて、意地悪くにやりと笑つた。

そうなのだ。

僕も、いつかこの生活が無くなつたら、と考へると、ひどく恐ろしくなる。

「時」は決してどちらも無いことこの上。

そして、それは「今」起つてこる事実といつ訳でもないのよ。

頭の中で、それを不安に思つてゐる。

心を、痛めているのだ。

・・・結局、僕は、何も分かつていないので。

「じゃあ、また少し出でへる、華梁。」

「こなんに遅く、どこへ行くんだ?」

「明日の食材探し」

「わざわざ今から出でなくても良いだろ?・もつ外は暗いぞ。食材ならもう少ししゃりいなら残つてるだろ?」

「いや、せつまでは残つていたんだが。」

「どうしたんだ?」

「涼美に食われた。」

「涼美いいいーーー!」

「まあ、食後の散歩だ。行つてへる。」

「・・・ああ、すまんな。つて、涼美は残つた皿を名残惜しそうに

見るな。そんな顔しても今日はもう料理は出ないぞ。」

僕は苦笑して、香泉寺の外に出た。

## 第一話 道の始まり

山門をくぐり抜けた時にふと立ち止まり、仰ぎ見た。

古ぼけた荒れ寺の山門には、真新しい字で香泉寺と書かれていた。僕がこの寺に来たときに華梁が書いた物だつた。

香泉寺、と言ひ名には、由来が有ると華梁が言つていたのを覚えてゐる。

この信仰が盛んな国では、教えを香に例えられるらしい。

香という存在自体が、教えの本質に似ているから、なのだそうだ。

例えは香の香りを衣服にしみこませれば、香から離れてもその香りは衣服に残るだろ？ 修行者は教えを一度聞けば、例え寺の中じゃなくても教えを実行できる。そんな意味合いを込めたものだ。

そう、華梁は言つていた。

香が、泉の様にわき出る寺。

「俺は、暦縁さんの教えを広めたい。だから香が泉の様にわき出る寺と、暦縁さんの教えをたくさんの人々に広めたいと思つてこの寺をそう名付けたんだ。」

「今は、涼美と憂だけだ。だけど、いざれ。たくさんの人でにぎわう寺にしたい」

先は、長いけどな。

そう言つて華梁は笑つた。

僕も、出来ればその夢を叶えてあげたい。

そのためには、僕自身が救われていなければならない。救いとはどういう物かと言うことを分かつていなければ、人は救えない。

そして、

人を救う事が出来れば、僕の手によつて苦しめられた人を救うことが出来る。

都合のいい話かもしない。彼らを苦しめた僕が、彼らを救いたいだなんて。

・・・しかし、僕がたとえ罪の報いを受け不幸になつたとしても、僕の手にかかり死んだ人は生き返らない。不幸になつた人は、幸せになれる訳じや無い。僕の行つた罪は過去のものだからだ。

だから、僕は。

精一杯努力して、救われる。

そして、僕が得たものを他の人に伝える。

僕の話を聞き救わられた人がまた人に話せば、その次の人も救われる。次の人も話せばその次の人も救われる。

そうすれば、たくさんの数の人が救われる。

この一生を、他を救う事に捧げたい。

そう、思ったのだ。

## 第一話 再び進み始めた時間

滝壺にたどり着いた。

香泉寺の近くにある、大きめの滝壺。僕はここでよく食事のための魚をとる。

盛大に落ちる水が、しぶきをあげている。

岩下に手をやり、脇間仕掛けた魚取り用の罠を見てみるが、魚はかかっていないようだつた。

「・・・ しょうがない、素手で捕まえるか。」

一人で生活している時は良くやつていたことだ。性質が獸なのか、取ろうとおもえば魚でも山の獸でも簡単にとれる。

そうか。

良く考えれば・・・この能力のおかげであまり空腹にはならずにするんだのだ。

もしかすると、今まで生きられたのも、この能力があつたからなのかもしれない。

ゆっくりと、自分の顔をなでてみた。

すこしじだけ口元に笑みがこぼれる。

不幸といつのも、考え方次第で変わるものなのだな。

そう思つと少しだけ気持ちが楽になつた。

半刻ほど魚を捕ると、明日の朝食に使うのには十分な量になつた。

あとは、山菜でも採つていいくか。

見れば、日は大きく西に傾いている。

もうじき帰らなければ帰り道が困難になるだろう。

もう少しぐらうなら大丈夫か・・・。

そう思い、僕は顔をあげた。

谷に生えた楓の下に、

見覚えのあるものがいることに気がついた。

それは、ひどく楽しそうな眼で僕の方を眺めている。

直感する。

僕の、幸せな時間は、

今、終わったのだと。

今、何て物はない。

そう、思っていたのに・・・

そう

時は簡単におわりを告げるのだ。

楓の葉が舞う木漏れ日のしたに

皮肉なほどに、同じ姿で

浅黄色の衣の子が、立っていた。

にい、と、それは歯を吊り上げた。

一  
さつきね

やうやく手配がついた。

れいねきれいねきれいね

樂山記

一  
せ  
と  
み  
け  
た  
上

「おまえはなんだいきたる」

「なんでわざつてる」

## 言葉が出ない

けらけら

けりけりけりけり

壁  
う

騒い声がこだまする。

なぜ、嘘つてる・・・?

なせ、そんなに樂しそうに舞っている？

殺される、と思つた。

「 むかし 、 え。」

からうじてしわがれた声を出した。

- ゆるせない

表情が消えた。

歩み寄る？

・・・今の彼は飛んでいない。

彼は、僕を捜すために、望みを空に託した。

飛ばない、彼は・・・

今度は、何を望んだのだろうか？

見れば、彼の手の平は

暗い闇の色へと化していた。

「絶望と後悔の狭間で苦しめ。罪深き狐よ。」

そう言って、

僕の胸を突いた。

嘘のようにすんなりと僕の胸に突き刺さる手の平。

血が・・・吹き出る。

意識が、遠のく。

これが・・・僕の死？

死ぬ・・・のか？

いやだ。

いやだ！

だつて・・・

僕は、まだ何も分かつていなーじやないか・・・！

#### 第四話 崩れゆく意識の中で

お前さんは、『』でくたばるのは、ひと早すぎるんじゃないのか？

不意に・・・誰かの声が聞こえた。

「お前さんにはまだ役目がある。」

聞き覚えがある。

「人に関わると俺も危ないのだがな、今回限りだ。」

この声は

「 方・・・千！」

「ほお、覚えておったか。久しいの、一年ぶりだな

崩れ去るうとする僕の体を、方千が支えた。

「よく狐を出さずに理性を保てたの、つ。」

そう言つて、未だ手を僕の中から抜き出でない子をにらみつけた。

「褒美じや、後は任せとおけい」

子の、動きが止まつた。

「だれ・・・だ」

僕の体から手を抜き、後ずさる。

「お前と回じものだ、が、お前とはちと格が違つがの。」

そつまつて、口で小ちく呪を唱えた。

とたんに、がくつと子の膝がくずれ、地面に倒れ込んだ。

「さて、どうかで聞いとるのだろ?・靈元よ。」

子に向かい、楽しそうに方千がそつまつた

「わしと力比べでもしてみるかの」

ふお

ふお

ふお

方千が、高笑いをする。

と、子が唐突に口を開いた。

「あなたと、力比べをする気は毛頭ありません。」

先ほどのとほつて変わった口調でわいつた。

「仕方ありませんね、今日は私が下がりましょう、しかしながら  
も、自らが理に消されたく無いのであれば、むやみと人に関わらぬ  
ことですよ」

「は、わかつておるわ」

そいつて、方千はにんまりと笑つた。

「……ふ、では。またいづれ」

不敵な笑みを浮かべ、子は次第に姿が薄くなり、消えていった。

「ほつ、青! 一才が生意気な口を聞きおつて。」

笑みを浮かべたまま、方千がそう言い放つた。

「さて、大丈夫か? 順」

「……ああ」

血はまだ止まつていないが、急所は外れたらしい。

「とにかく、安静にしておれ。近くにわしの住まいがある、と  
えずそこで手当をしよう。」

そいつて、方千は僕を抱えて森の方へと歩き出した。

## 第五話 呪と思い

気がつくと、崩れかけた様なあばら屋の中にいた。

穴の開いた壁から、外の風景が見える。

夜空に浮かんだ白い月。

そうだ、

あの時、あの子供に出会ったのも、こんな月の夜だったな。

そこまで思い出した所で、僕の頭は覚醒した。

俺は・・・あの子供に、胸を刺されたのだ。

急いで刺された所に手をやると、そこには布が巻かれていた。  
どうやら、介抱された後らしい。

「気がついたか？」

声のした方に眼をやると、方千が杯を持ち壁を背にしながら坐っていた。

「・・・方千」

「こは、方千の家か。

「お前に、あの衣の子がどのよつたものか、言つておかねばならぬよつだな」

とくとくと、酒を杯にそそぎ、ゆりくつとした口調でそつといた。ふんと、酒のにおいが辺りに充満する。

「お前は、あのよつたものの事を、ビリまで華梁に教わつた？」

あのよつた物。

華梁は最初にあれを見て、なんと云つただろうか？

抑圧された人の思い、その姿。

確かに、それは・・・  
「ひとの・・・思い。」

僕がそつと方千は「つむ」と云つて頷いた。

「その通りだ、あれは。人の思いが形になり、この世に生まれ出たものだ・・・故に、本来なれば、実体がない」

「実体が、ない？」

そつと云えど、華梁も『・・・本当は触れる事すら出来ないのだが・・・』と、そんなことを云つてゐた。

「その通りだ、触れる事も出来ぬし、同時にあちらが我らに触れる事も出来ぬ。」

え？

「それなら、なぜ、俺は奴に刺されたのだ」

「そうだ、現に傷口はある。実体が無いのであれば、僕に触れる事すら出来ないはずだ。まして、僕の体を貫き通せるわけがない。」

「問題はそこだ。」

「そう言って方千は数歩下がった。」

「言葉で説明するよりも、実際に試した方が早い」

方千は懐から白い紙を取り出した。

「これを持っておれ」

紙をうつさとる、と同時に方千は小さく呪を呴えた。

すると、紙は勢いよく炎を放ち燃え始めた。

慌てて、手をはなす。

紙はしばらく床の上で燃え続け、程なくして消えた。

「……何をする。」

「どうだ、熱かったか？」

「当たり前だ。」

見ると、僕の手の平には小さく水ぶくれも出来ている。

「まつ? それはおかしいの」

何故かわざとらしく首をかしげる方干。

「今のは幻の炎だよ。熱さなんか感じる訳がない」

「なに?」

「見ひ」

そう言つて、先ほど今まで紙の燃えていた場所を指さす。

そこは、焦げ目一つもついていなかつた。

「どうこいつ……」とだ?

僕は確かに熱さを感じたし、現に水ぶくれまで出来てこる。

なのに今のが幻の、炎?

ならば、僕は何故熱さを感じたのだろうか?

「それが、『思い』だ」

「……」

「お前は、炎を見て、頭の中で『熱い』という感覚を呼び起こしたのさ。だから実際には熱さが無くとも、体がそれに反応する……」

水ぶくれができたのもそのせいだ

いや、まさか・・・  
そんなことが、実際に起つるのか?  
信じがたいことだ。

「思ひ、の強さはそれほどまでに大きい。・・・病は氣から、とい  
う言葉もあるがあれば迷信ではない。実際に思ひは体の症状にまで  
表れる。」

お前の、顔のようにな。

そう言われて、思わず顔に手をやつた。

さりさりと、顔が半分から獸の手触りになつていて

しかし、これは・・・

これは・・・呪いのせいだ。

「・・・お前が何故、狐の姿になつたのかは、俺には分からぬ。が、  
お前も思いによつてそうなつてしまつたは事実だ。この世にはお前  
らの言つてゐる様な呪いなど無い。実際に手を出さなければ、人を  
傷つける事など出来ないさ。呪いで操つてゐるのは、人の心だ。」

「人の心?」

「ただ呪いをかけるだけでは意味がない。大切なのは「呪をかけた  
事実」と「信憑性」その二つが混じり合つことによつて、強い「心  
の不安」が生まれる。それが、呪いの正体だ。」

なりぢ、

やはりこの顔は、

僕の、心の不安か？

「前にも言ったとおり、それはお前の心の不安が形になつたものだ。・・・そしてあの子供もまた、憎しみという心の思いが世に生まれたもの・・・どちらも「思い」によつて生まれてしまつたものなのだ。呪は、そのきっかけ・・・心の不安を呼び起こすための、ただの引き金に過ぎぬ。」

## 第六話 あいつのまき

それならば、呪いとは我々の心をかき乱して、自らの想にこみで血を傷つけさせるだけのものとこいつとか。

「では、ここの傷は、俺があの子供に「刺された」と思った事によつて生まれたものなのかな?」

「やうこいつになるとなるの。」

「……いや、まさか。」

しかし、事実、僕の手には水ぶくれが出来ている。

思いは……体にまで影響するのか。

方千は、これを教える為にわざとここのよつなやり方をしたのか。

確かに言葉で説明されただけでは、信用できなによつなことである。

「わかった、信じる。では、その事実を知ったからには、もう一度あの子供と対峙しても俺に勝ち田があるとこいつとか?」

「たわけ。人の思いは理屈ではどうにもならん。奴の呪はお前の心に直接訴えてくる物だ。お前の心がかき乱れたときに、落ち着こうと頭で考へてもどうしようもならんだろう。それと同じだ。理で解したところで、どうにもならんのだ。そんなことをすれば逆に相手の思つ壺だぞ。」

「……では、どうすればいい。」

「簡単だ。ありのままをみればいい。」

「ありのまま?」

「そうだ。お前が眼で見、耳で聞き、鼻で香り、舌で味わい、身で感じたことをそのまま受け入れればよいのだ。」

「どうこうの事だ?」

「呪は、人の思いをだます。思いに惑わされる事がなければ、どんなに強い呪にもかかることはないのだ。」

「……そんなことが、できるのか。」

「実は、お前は気がついていないだけでもう出来ているのだよ。」

「……は?」

方千も……歴縁さんと同じようなことを言つた。

「……そんなこと、どうすれば出来るよつになるんだ?」

「どうすればいいか、ではない。何もしなくていいのだ。」

「……そんなことを言われても納得は……

ばん!

僕が言葉を言いかけた時に、いきなり方千が思い切り床を叩いた。

「なんだーーいきなりーー！」

思わず言葉を荒げる。

「…………どうだ？』

「なにがだ？」

「お前は、今の音を理で解したか？床で叩いた音を頭で「聞く」  
と感つたか？」

「…………いや。」

「…………いや、聞く」と思わずとも聞く」とは出来るのだよ。特別何かし  
よつと思わなくとも、お前はいつもありのままなのだ。」

## 第七話 方干の正体

大切なのは それに気づくことだ。頭で理解しようとすればそれは逆に逃げてゆく。己の中で本当にそれを納得することができたのならば、どんな呪にでも負けないだろうよ。」

そう言つて、

ぽんと、僕の頭に手を乗せた。

「お前は、自分を苦しめすぎている。靈元はそれにつけ込んだのだ  
「やつひ」

そして、やつひと優しく僕の頭をなでた。

「……靈元はおやつひ、お前と同じようにあなたの子供の恨みを利用し  
てこらのだらひ。」

「なぜ、……あいつはそんなことをしているんだ?」

「……わたしにはわからぬ。私に読めるのは人の心だけだ。それも、長寿の経験のたまもの。同じように生きている奴の心は、もう読めぬ。」

暇つぶしか、

それとも、

周りを巻き込んだただの自害行為なのか。

方千は独り言のよつとやうづぶやいた。

「……いつたい、あんた達は何者なんだ？」

方千は、靈元の事を知りすぎている、知り合い同士である事は間違  
いは無いだらう。

しかし

方千も、靈元も 普通ではあり得ないほど力を持つている。そ  
れこそ、人では無いかのような。

まるで、

……化け物と言われた、僕と同じような。

「ん？ 教えて欲しいかの？」

「……そこまで言つておいて、聞かずにおくのは気持ちが悪いだろ  
う」

僕がそりと、方千は「それもそうだの」と言つてこやつと離  
れた。

「俺と靈元は突き詰めれば同じものだ… そりだのう一言で言えども

神様だよ。

方千は、事も無げにそう言つた。

「 は？」

「 だから、お前達が神と呼んでいる物だ。これでも千一百年は生き  
ておる。」

神 様？

千一百年？

方千が？

「 もっとも、我々は、人の「神様」という思いから生まれた、  
只の虚像にしか過ぎないがの。人が神という考え方を作り出しだし、  
それを拝む事によつて思いが強まり、俺達はこの世に生まれ出でし  
まつたのだ。故に、人無くして、我々はあり得ない。たつた今も、  
お前というものが「方千」と言つ存在を認めているからこそ、この  
世にあり続ける事が出来るのだ。もしもお前が、「方千」という存  
在を知らなければ、……俺はここにいることすら出来ない」

俺も、その疵痕をつけた子供と同じようなものなのだよ。 と方  
千は自嘲しているかのようにそつと言つた。

## 第八話 荒涼神

「神とは、人の思い込みの産物なのだよ。人が望んだから、俺はここに生まれる事が出来た。人が「神」という「呪い」を俺にかけたのだ。神という呪いをかけられ生まれて来たものであるから、俺は人々が「神」という考え方から連想されたものと、同等の力を使う事が出来る……例えば、憂は「神」から何を想像する?」

神。

神か。

神とは……

信仰の対象だ。

信仰する者に対し、幸福をもたらす者。

……望みを叶えるものである。

「そうだの……神とは望みを叶えるものだ、いや、叶えるものだと  
言われておる。言われておるからこそ　俺も、　人の望みを叶  
えることが出来るのだ。」

「この国は、「神」が信仰の対象だ。その他の宗教は、多少例外があれども　無い、ことになっている。暦縁さんや華梁が言つて  
いるような「仮の教え」というものは、わずかな人にしか伝わっていない。悪く言えば　邪教と呼ばれても良いようなものである。暦  
縁さんや華梁のおかげで、知っている者が増えた事は確かであるう

が、未だ宗教として認められてすらいないものなのだ。

この国は、ただ「神」の存在が信じられているだけである。おそらくは、ほとんどの国民が神と言つ存在が実在するのを信じているのではないだろうか。だから、年の初め、年の終わりは必ず神に祈りに行く、願い事が有れば、わずかな淨財をさげ、願い事をつげにゆく。 信仰者が多いが故に、それによる「御利益」があつたと言つ者が多く出てくる。 それにより、また信仰者が増えてゆく。

疑いを持つ者も減つてゆく

「この国は、思いが強すぎるのだ。人の思いは、時として実在しない物までこの世に生まれ出させることがあるのでよ。」

それが、方千と、靈元。

そして、この僕の顔もまた、気が影響しているらしい。

神もまた

人の、思いだと言つのか。

「 荒涼神と言つもの知つてゐるかの？」

方千が、唐突に尋ねた。

荒涼神。

聞いたことが有る。

確か。

何年か前に起こった厄災につけられた名だったと思つ。

「じく最近の話だよ。ほんの十年前くらいだ。その年、ある村を原因不明の厄災が襲つたのだ。津波でもない、地震でもない、竜巻が起こつた訳でも無いのだが……村が一つ、一晩のうちに跡形もなく消えさつた事が有つた」

「消えた？」

「ああ。まさしく、「消えた」のだよ。……その厄災が襲つた後は、村には、建物どころか草木の一本も残つていなかつたのだからな。……もとあつた村は、まるでそこには始めから何も無かつたかのよう……一晩の内に只の平地になつていたのだ。」

草木の一本も無く

それは、

あり得るのか？

少なくとも、天災ではあり得ない。地震だの津波だの、竜巻だの、起つた後には必ず大きな爪痕を残す。

しかし、天災があり得ないとすれば、一体何なら可能なのだろうか？

……。

ああ、なるほど。

だから、荒涼「神」なのか。

人の望みを叶えられる、神ならば 可能だ。

「そうだ、こんな事が出来るのは、俺や靈元と同じ人の思いで作られた神でしかあり得ない。 しかし、だ。そう考えれば、一つの疑問が起ころ。」

## 第九話 Hetu-Pratayaya

「疑問？」

「そうだ、神は人に望まれなければ生まれる事は無い。人に望まれなければ生まれようがないのだ、……元は、「無かつたもの」だからのう」

それならば

「荒涼神は、誰かに望まれたから生まれた、と」

「……そうだ。しかしながら、誰が荒神の出現を望む？誰が、自らを滅ぼそうとするものを生み出そうと望むのだ」

そうだ。

神が、人の「思い」から望まれて生まれた者だとすれば、当然、村を消した荒涼神もまた、誰かに望まれ無ければ生まれる事は無い。

荒涼神は、望まれたからこそ生まれた。

では、誰が？

「俺はな……」

方千は、何かを思つようつゝまつりとつぶやいた。

「理が望んだからだと思つておる。」

「 ことわり？」

「 そうだ、神といつ、世の均等を崩す者が人の思いによつて生まれたのだ。 理は、当然、

均等を保とうとするだろつ。 神に太刀打ちできるものは神でしかありえんからの。 荒涼神は、均等を保とうとした結果、思いによつて生まれて来た者ではないかと、そう思えてならないのだ。」

そういうえば、華染が、前に同じようなことを言つていた。

「 」の世界が網の目のような関係にある。 お互いがお互いを支え合ひ、何か欠ければ、何かが狂つ。 均等を保ちながら、この世界は構成されている。

世の均等を崩すものが一つある、その一つが、人の想いだ。

そういう、ことか。

「 その証拠にな、荒涼神は、村を消した後、まつすぐ俺の方へ向かつてきた。 おそらく、俺を消すことを本能で察していたのだろうな」  
「 ……それで、どうなったんだ」

方千は、消えていない。

と、言つことは、方千は荒涼神を消すことが出来たのだろうか？  
「 負けたよ、手も足も出なかつた。」

負けた？

「しかし……」

方千は、生きている。

「俺が荒涼神に消されそうになつたとき、暦縁に助けられたの  
だ」

暦縁

暦縁さんが？

「……どうやつたんだ？ あの人があんなに強いとは思えないぞ」

「もちろん、荒涼神と戦つたわけでもないし、身を挺して守つてくれたわけでもない。少しだけ荒涼神を諭しただけだよ あの人的话は、不思議な力を持つているからのう、荒涼神は元は人の子だった。話が通じない相手では無かつたのだ」

「人の子、だつたのか？」

元が人の子？

まさか

僕と、同じ？

「人の子だよ。もつとも、理は形のないものだからな、なににでもなり得ることが出来る。あるときは生き物、あるときは天災、ある

ときは人の思いとして、様々な形をなしながら、世の均等を保つておるのだ。しかし、俺や靈元の力は世の均等を保たせる為には強大過ぎるのだよ、だから その力を押さえ込むために、「荒涼神」が生まれた。均等を、保つ為のな。 俺らが人の世に干渉し過ぎれば荒涼神が生まれる。だから俺は、人の世に干渉しそぎないよに、こんな山奥で一人暮らしている。あまりに力を使い過ぎれば、また十年前のようなことが起っこつてしまつからのう。」

「 でも、それならば何故、靈元はあそこまで人の世に干渉しようとしているんだ? 荒涼神の事を、知らない訳ではないのだろう?」

「 もちろん、靈元は知つてゐるさ、荒涼神の生まれる要因もな」

「 だつたら、なぜわざわざ荒涼神を生み出そうとしているんだ? それは自らの死に近づくこととしているだけじゃないのか?」

「 だからだよ」

は?

「 精元はな……多分、自らの存在を消そうとしているのだと想つ」

存在を、

消そうとしている?

「 ……何故、そんなことを」

「 人が生きるのには、俺らの寿命は長すぎるのだよ、人は考える事が出来る。考えれば思いが生まれる。思いがあれば苦しみが生まれる。苦しみから解放されなければ、永久に生き続けるのはつらすぎ

るのだ。靈元は、苦しみから解放される方法を見いだす事が出来ず、あきらめたのだ。だから、死を選ぼうと思つたのではない。か。

我々は、人の思いから生まれた故、思いが無くなれば、死ねぬ。我々は自ら死を選ぶことすら、許されないのだ。存在を消せるとすれば、理から生まれた荒涼神しかあり得ぬ。靈元は荒涼神を生み出し、自らの存在を消そうとしているのかもしれぬな。」

「……じゃあ、なぜ、靈元は俺たちを襲うんだ？ 世に干渉するだけなら、わざわざ俺たちを襲う必要は無いだろ？」

「簡単だ。それは、お前達が暦縁の教えを守ろうとしているからだろ？……もっとも靈元は暇つぶしといつとたがの……靈元が何百年かけても分からなかつた苦しみから解放される方法を、暦縁はあつさりと見つけ出したのだからな。……靈元にとつてこれほど珍々しいものは無いだろ？」

妬み、か。

数百年も、自分が求めてきた答えを、ほんの数十年生きた暦縁さんが見つけ出したのだ。

確かに、それは

靈元が生きてきた数百年を、否定する事にもなる。

「……もつとも、お前に対してはは別の理由があるのかもしれぬがの」

「別の理由？」

「ああ

「俺は、お前が、靈元の生み出した荒涼神ではないかと思つていのだ」

## 第十話 居士覗罪懺罪（じじべめれこわせわい）

「俺が？」

「ああ、それならば、お前のその顔も、力も、靈元のお前にに対する執心も全て説明がつくのだ」

そう言つて、方千はじい、と僕の顔を見た。

「お前の顔が、まだ半分人の顔をしているのは、お前の理性がまだ残つているからだろうな……お前の理性が、何らかの形で無くなってしまえば、おそらくお前の顔は、完全に狐のそれに変わつてしまつだらう。」

思わず顔に手をやり、ゆづくつとなでた。

さりさりと、狐の毛の乾いた感触が手に残る。

左半分は、まだ人それである。

十年前のそのときから、僕の顔は少しずつ狐の顔に変化した。

しかし、ある日を境に、顔の変化が止まつたのだ。

あれは

そうだ

暦縁さんが、僕を人と認めてくれた時からだつたな。

暦縁さんは、顔の変わった僕を唯一人と認めてくれて、人と同じよう接してくれた。

そうか

それで、僕は今まで、人としての理性を無くせずにいたられたのか。

……「」の姿になり、何度も僕は人を捨てようと思つた。

いつそ心も体も獣になりはて、畜生となり余生を生きた方が、罪に苦しまず生きることが出来ると思った。

だけど……暦縁さんに出会い、人として生きる内に、「」の気持ちが揺らぎ始めたのだ。

こんな僕でも、人として生きていっても良いのではないか、と。

こんな僕でも、幸せをつかみ取つても良いのではないか、と。

暦縁さんのもとで暮らす内、ほんの少しだけそんな気持ちが、僕の心の中で芽生え始めた。

でも、

僕は、それまでに人を殺しそぎていたのだ。

これほどの罪を背負いながら、一人だけ幸せにならうところのは、おこがましすぎる。

だから

いつそのこと

暦縁さんを殺して、そんな淡い希望を捨て去らうとは思つたこと  
があつた。

暦縁さんは、武術の心得などは無い。

寝てゐる隙に首を掻き切れば、容易く命を絶つことが出来る。

暦縁さんを殺せば、

僕を人として認めてくれ、僕自身が大切だと思つたこの人を殺せば

おやぢく僕の理性など、簡単に消えてくれるだらう。

罪の意識など生まれる間もなく

悲しみを感じる間もなく

後悔する間もなく

簡単に、僕を真の獣と変えてくれる。

苦しみが、無くなってくれるのだ。

それは、ひどく魅力的な考えだった。

ある日の夜に、

僕は暦縁さんの首に手をかけた。

ひどく小さく、弱く、貧弱で、もう一體だと思つた。

少しだけ手首をひねるだけで、この生き物の命を奪う事が出来る。

ひどく簡単だ。

こんな簡単な事をするだけで苦しみが無くなると思つと、滑稽で声をあげて笑いそうになつた。

でも、

僕には、それが出来なかつた。

僕が首を掻き切つとしたとき、

暦縁さんは、

いつもの笑顔でこいつとほほえみながら、  
右の、まだ人の形をしていた頬をなでたのだ。

まるで、

僕に、人であつてほしいと語りかけるよつじ。

それから先はほとんど覚えていない。

気がつけば、僕は死体の山の上で泣いていた。

暦縁さんを殺せず、感情がおさえきれなくなつた僕は、西連寺の近くにあつた村人を手当たり次第に殺したのだろう。

うず高く積み上げられた、死体の山の上で、獸ともまじりの姿で……  
獸のように咆吼していた。

でも、

僕の理性はまだ残つていた。

涙が流れているのがその証拠だ。

僕は、

まだ、

人の姿を残している。

これだけのことをしても、

……それでも、獣にはなれなかつた。

これだけ殺しても、理性を無くすことが出来なかつた。

人のまま、人の罪を新たに背負つてしまつただけだつた。

人の命を、また奪つてしまつただけだつた。

自らの心をいたずらに傷つけてしまつただけだつた。

大切な人との絆を、

ただ乱暴に断ち切つてしまつただけだつた。

暦縁さんはもう、会つことは出来ないと思った。

僕は、西連寺には一度と近寄らない事を心に決めて、村を後にした。

まだ僕は、あのときの選択が本当に正しかったのかどうか、迷つことがある。

あのときもし、暦縁さんの首をかき切つていれば、僕は本当の獣と

なつて人としての悩みが無くなつていたのではないかと。

救われていたのではないかと、

かなかなど、白々と夜が明け始めた朝靄の中で、静かに蜩が鳴いた。

「ふむ、……それで、お前はどうするのだ」

「……どうする、つて？」

「荒涼神になれば、悩みなど無くなるのではないか？　お前のそれは、神を殺すだけのただの獣だからな。……苦しみの起る原因是、人の思いや考えだ。人の思いが無くなれば苦しみからは解放される。このまま靈元にされるままになつておれば、容易に荒涼神になれるだろうな。」

「……」

「しかし、このまま人の理性を持ち続け、人として生きるのであれ

ば、お前は死ぬまでその罪と共に幽められる事はないだろ？」

「……ああ。」

「さあやがれのだと、憂う。」

## 第十一話 不立

「 魅力的だな、確かに。」

獸 荒涼神になれば悩みからは解放される。

この、獸になるといつ事を躊躇つ心され、荒涼神となれば無くなるだひつ。

苦しみとこゝ概念が無くなれば、苦しむ事など無い。

考える事が出来なければ、思い悩む事は出来ないからだ。

過去を顧みる事が出来なければ、過去にあつた出来事で思い悩む事もない。

未来を思つ概念が無ければ、未来を思い不安に思ひつともない。

比べる事が出来なければ、暑いこと言つ」とも無ければ、寒いこと言つともない。喜怒哀楽と言つ概念すらなくなる。

たつた今があるだけで、それ以前の事柄とも、それ以後の事柄とも、比較することは出来なくなる。

否。

違つ。

「苦しみ」「過去」「概念」「無い」「顧みる」「出来事」「未来」

「暑い」「寒い」「喜怒哀樂」「今」「事柄」「出来なくなむ」「無くなむ」

こんな概念すら、思想から生み出された考えでしかない。

そんなものは、本来、

「無」  
なのだから。

いや

言葉で言こと表せばそれはもつ「無」ではない。

「無」すうり、言葉なのだ。本当の、「無」ではない

これらは、全て頭に中で考え出された概念。

言葉で表せば、眞実は逃げてゆく。

荒涼神になれば、こんな思想すら無くなる。

極むとこつ概念が無くなる。

それは、とひも「樂」などだらうな。

「 おれは、どちらでも良いと思うがな。善悪など、個人が決める」とだ、獸にならうと、人を続けようと、憂が正しいと思つたものが正しいんだ。誰が何と言おうとな。この世には眞実など無い、それすらも人の作り出した概念だから。だから、お前が眞実と思つた選択が眞に正しい眞実なのだよ」

このまま、獸になると言つ選択もある。

そちらを選んでも、誰もそれが間違つた選択だと指摘する」とは出来ないはずだ。

獸になれば、苦しみが無くなる。

苦しみから、解放される。

が。

「 ……俺にとつては、その考え方こそ間違つてこる。」

「 どういう事だ」

「 人も、獸だ。本来、苦しみから解放されているはずだ。それに気づかず、苦しみから逃れようとあがき苦しんでいるだけだ。」

人もまた本来、悩みの概念の無い生き物のはずなのだ。

「この世には今しか無い。過去と言つのも未来と言つのも全て頭の中の想像でしかない。」俺が杯でた床をたたいた音はたたいた瞬間にもう終わつていい。それなのに、人は記憶してその事柄に執着する。終わつたことをいつまでも頭の中で反芻する、事実はこんなにはつきりと終わつてているのにもかかわらず、だ

大切なのはありのままの自分。蜩の鳴き声は聞こうと思わずとも耳に入る。肌は夏の暑さを感じる、耳は夏の庭を見せてくれる。舌は酒を飲めば酒の味がするからな

この世には、苦しみは残つていない

「人は、始めから悟つていい。ただ、それに気づいていなければんだ」

そうだつたな、暦縁さん。

「俺は、人でなければ暦縁さんのこの言葉を証明出来ない。」

だから

僕は

「……生きて暦縁さんの言葉を証明しなくてはならない」

それが、

僕が暦縁さんに出来る、唯一の償いだ。

償いとしては、とても足りないかも知れないけど。

僕が、苦しみから解放される方法を受け継ぐことが出来れば、たくさんの人を苦しみから救う事が出来るかも知れない。

だから、僕は。

「人として……生きることを選ぶ。」

私は瞳を開いた。  
くくりつ

リリは、どう？

体を起こして辺りを見回す。

薄暗い、寂れた建物。

香の香りがほのかに鼻をくすぐる。

普通の、家ではない。

やしき  
社とも違つ……でも、

違つけれど、似ている気がする。

どこのだらう？

分からない。

分からぬけど、見覚えがある。

分からぬけど、私はこの場所を知っている気がする。

そうか、

これは、体の記憶。

心が空のせいで、頭は何の記憶もとどめていなけれど。

体の方は、覚えている。

この方に

この手触り

この風景

覚えている気がする。

でも

記憶は、無い

私の最後の記憶は、そう

夏祭り

そう、夏祭り。

私は、神に仕え、神の言葉を人々に伝える役目だった。  
私は、神に仕え、人々の願いを聞き届ける役目だった。

その夏祭りの夜も、

同じように神託を、人々に告げていたと思つ。

それから…

…… そう

皆が引け、寝静まつたころ

最後に一人の男が現れたのを覚えている。

男は、怪我をしていた。

一目で手遅れだと分かるような、ひどい怪我。

それなのに、男の瞳は生気に満ち、生きようという意志を感じた。

いや、生きよつといつよりも

生きて、何かをやり遂げなければいけないという、使命感の様なものが感じられた。

でも、男の体はもう限界で、生きたところで後数刻も持たない

そうか。

だから、最後の望みを叶えるために、私の所までやつてきたのか

私には、望みを叶える力がある。

神に近い力を使うことが出来る。

「……なに？」

私は男にそう問うた。

男は、

最後の力を振り絞り、

私に、願い事を告げた。

それから

……それから、覚えていない。

それから先がどうしても思い出せない。

私の記憶は、ここまで。

ここから先は、心を無くしていったよに曖昧。

あれから、どれくらい時間がたつたのだろうか？

体を見回す。

見慣れない紅い衣を着てている事以外は、体はあの頃とほとんど変わりは無い。

いや、

私は特別な存在だったから

あのときからずっと、成長の出来ない体になっていたはず。

だから

私の体は、小さいまま。

ずっと、何十年も、小さいままだった。

神に、従えていたから

神に近い存在だったから

私自身が神に近い存在だと「思った」から

神に、力を与えられた。

不老という、力を与えられた。

そう

私は、神に近い存在だった。

思いが強かつたから

私は、普通の人が持っていない、特別な力を与えられた

神に近い力を与えられた

私は、神に近い存在だった。

でも

近いだけじゃダメだつた

私は、神になりたかったのだ。

神に近い存在だつたけど

神じゃなかつた

じゃあ、

私は、何

私は一体、誰？

私は

そう

私の、名前は。

そのとき、

月明かりに照らされた濡れ縁に、一人の男が立っている事に気がついた。

水干を着た、怖い目をした男。

いつの間に、立っていたのだろうか？

男は私を見て、冷酷な笑みを浮かべ、静かに口を開いた。

お前に、今一度望みを告げよう。

男はそう言って、

私に、再び、願い事を告げた。

たとえば、河かわをすぎ山やまをすぎがごとくなりと。いまはその山河せんがたど  
ひあるらめども、われすぎきたりていまは玉殿朱樓ぎょくでんしゆろうしょせんが

とわれと、天てんと地ちとなりとおもふ。

（道元著 正法眼藏 有時より

抜粋）

「人として、生きる」

僕がそう言つと、方千は楽しそうに口元に笑みを浮かべ

「か、」

か、か、か、

かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか

からからからからからからから

乾いた、囁き声を上げた。

朝靄の中、蜩の寂しげな鳴き声に覆い被さる様に、方千の囁き声が辺りにこだましている。

ひどく、楽しげに

何かがふつきれたように

でも

その囁き声はどこか、寂しげで

静かで

悲しそうで

何故か僕は、

泣いているのかもしれない、と

そう、思った。

く く く

ひとしきり喧つた後、方千はつぶやくよつとして口を開いた

「この国には、神はもういらぬのかもしれぬのう」

「……え」

「神もまた、人の思いだからな、神では、人は救われぬのさ」

そう、

神もまた、人の迷いなのだ。

方千は、ぽつりとそう言った。

「のう、荒涼神」

荒涼神

僕の、事か。

「お前も、神だ」

僕が、

……神。

「完全に荒涼神にはなつていないとお前でも、人には使えない力を持つていて。その気になれば自らの願いくらいは叶える事が出来るだろうな。だが……」

お前は今、救われているか？

方千が、そう問うた。

救われているか、か。

僕は、救われているのだろうか

否

悩みだらけだ。

僕は、首を振った。

「神は、人の願いは叶えるが、迷いを無くすことは出来ない。願いを叶える事と迷いを無くすことは別だからだ。願いを叶える事で、逆に苦しみが生まれる事もあるのだ」

願いを叶える事は、苦しみを無くす方法ではない　　のか。

「救われるためには、己のことを見つめなければいけない、己の苦しみを無くす答えは己の中にしか存在しない。己自身が苦しんでい

るのだからな」

「暦縁さんも、同じよひつな」とを言つてこた。

「救いに、神は関係無いのだ。救われたいのなら、神などに氣を取られるな、少しでもたつた今の自分を見つめてみる」

たつた今の、僕。

蜩の鳴き声が聞こえる。

万千の声が聞こえる。

万千の姿が見える。

傷の痛みを感じる。

坐っているから、足にせんべい布団の感触がする。

だけど

次の瞬間には、僕の体はそれらの事を一つも留めてはいない。

ただ、僕の頭の中で、それらが連續して起こつてことだと一つ

風に「思つてこる」だけなのだ。

蜩の鳴き声は、聞いた瞬間にはすでに別の声になつてこる。

万千の声は、もう聞こえない。

万千の姿が先ほどと同じだと「思つてこる」のは、僕の思ひだ。

「傷」が「痛い」という風に思つるのは後から「考へ出した」僕の思ひだ。

坐っているから、足にせんべい布団の感触がするが、立ち上がればその感触はもう無くなつてこる。坐つていた、と言つ記憶は「頭の中」にしか存在しない。

記憶を留めているのは僕の思ひ。

今しか、無い。

否、

今、と言ひ概念すら無い。

全ては思い。

無くなっている。

無くなっていることをいつまでも留めているは、

僕の、思いなのだ。

そして、

全てが思いだと考えていることですが、僕の思いに過ぎないのだ。

「救われるためには、神さえいらぬ、この身一つあれば十分なのだ。  
救わなければ、救いの道を得た人を探せ、探し出し出すことが出来  
たら、得ている人に教えを乞え。幸いお前は、得た人を探すこと  
が出来たはずだ」

「なら後は、教えをひつて只管ただひたすらに参ざるのがよからう」

と、言つて、

「のう」

方千は扉の方に体を向け、

「そうだらう、華梁」

そう、言つた。

## 第十二話 是非始因口 唯覺一場痴（前書き）

「是非始因己 道固不若斯 以棹極海底 唯覺一場痴」

是非善惡を始めから己が勝手に決めているが、もちろん仏道はこんなものではない、自らの見解で真理を極めようとするのは、まるでその場限りの愚かな行為である。

大愚良寛（漢詩の一部を抜粋）

## 第十二話 是非始因口 唯覺一場痴

何ぞ必ずしも更に是を分かち非を分かち、得を弁じ失を弁ぜん。

「碧巖錄」

「いつまで、そこに立つてゐるつもりだ？ セツセと入つてこんか」

方千がそう言つて、がらがらと立て付けの悪い戸が開いた。

そこには、神妙な顔をした華梁が立つていた。

「・・・・・華梁」

「盗み聞きとは趣味が悪くなつたのう、華梁」

「別にそんなことをしたつもりは無い。大体、じいさんなら俺が入つていいことなんかお見通しだろう？ 入り口に張つてあつた結界・・・・・・ありや、侵入者を見破るための結界だ。わからないとでも思つたのか？」

「ふん」

「むしろ、人が悪いのはじいさんだらう？ 僕がいることに気づいていながら憂には何のそぶりも見せなかつたんだからなあ」

「その必要もないからの」

そう言つて、華梁は僕の方へ顔を向けた。

十一

・・・・・ いつからいたんだ、  
華梁

一 初めからだよ

「はじめから？」

初めから、ここに立てていたのか？

ならば、華梁は・・・・・

方手の話をすべて聞いていたという」となる。

当然、僕が荒涼神だと云ふことも、

華梁 僮

「そんな」心地悪がる感じでいたわ」

僕の口をふさぐなりして、華梁がそう語つた。

「お前が荒涼神であろうが、何であろうが、俺は態度を変える必要がないだろう。荒涼神だから幸せになれないことはない。それに、お前は人であろうときめたのだろう？」

「くつといなずく。

「ならば、何の問題もない。荒涼神だから悪だとか、人だから良いだとか・・・・・そんなものは所詮、お前が作り出した勝手な思いでしかない。お前はお前で、ただそこに有るだけだ」

「・・・・」

「そこには善悪の区別をつけて、自分で勝手に苦しむな。苦しむだけ無駄だ。自分で自分の首を絞めてどうする」

はつきりと、何の迷いもなきよう・・・・・・けりとした顔で華梁がそう言った。

何を迷うことがある、と、そういいたげな顔で。

血の悩みが小さく感じるような、そんな顔で。

華梁らしく、と思つた。

荒涼神と・・・・・自らの境遇を恨もつとしていた自分が馬鹿らしく思えてくる。

「それよつも、憂。」

「・・・・・なんだ？」

「あの子供の居場所がわかつた

「え？」

「あいつは、あの村から俺たちの去った後、靈元につれさられ、ある場所に幽閉されている。お前が会ったのは、あの子供の思いだ。実体じやない。ある場所に閉じ込められ、お前に対する憎しみを強くさせられている。・・・・・どこに幽閉されていると思つ？」

僕への憎しみを　強くするために？

「・・・・・お前がいた、あの洞穴だよ。

あいつの親の死体と共に、な」

「・・・・・・・・・

「あいつは、連れ去られた後から今までずっと、洞穴に閉じ込められ、親の死体を見せられ続けていたんだ。お前への憎しみを忘れさせないために、お前への憎しみをより強くするために・・・・・・

ならば、あの子供は

自分の親の死体が腐り、蛆がわき、ひからび、骨になるまで・・・・

ずっと、あの子供は見続けられていたといつか

・・・・・それは。

惨い。  
ひむ

否<sup>いや</sup>

惨いなどと僕が言える立場じゃない。

親を殺したのは・・・・・他ならぬ僕なのだ。

あのトトロの苦しみを背負わせたのは、他ならぬ僕なのだ。

一番惨いのは・・・・・僕だ。

「・・・・・近くまで行つたが、靈元の張つた結界で洞穴の中に  
は入れん。・・・・・だが、な」

そう言つて。

「お前の力なら、結界を破れるかもしれん。」

華梁は僕をじっと見た。

「憂

「・・・・・・

「もしかすると、いやな物を見るかもしれん。昔の苦しみをもう一  
度背負う事になるかもしれん。・・・・・だが、これは憂じゃな  
くては出来ない事だ」

「・・・・・・」

「来てくれ。憂」

華梁が、僕の瞳から視線を外さずにそう言った。

そう、だ。

行けば、自らの罪を真っ向から見つめなければいけない。

行けば、せつかくの治りかけた過去の傷をえぐられるかもしない。

行けば、子供の悲しみを真っ向から見つめなければいけない。

また、立ち直れなくなるほど悲しみを背負うことになるかも  
しない。

僕はずつと逃げ続けていた。

つらいうことから田舎を背けていた。

でも

僕は、

もう、逃げたくは、無い。

逃げても、同じだ。

何も、変わらない。

そしてそれを教えてくれたのが。

華梁だ

「ああ、もちろんだ」

僕は、力強くそう言った

## 説破（前書き）

羯諦 獢諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶

智慧よ、智慧よ、完全なる智慧よ、完成された完全なる智慧よ、悟りよ、幸あれ

暗く、狭い洞穴の中で、獣とも人ともつかぬ「もの」が嗤つてゐる。

嗤い声とも獣の慟哭とも分からぬものが、くらい洞穴の中にこだまする。

嗤い声も枯れ果てた。

まだ・・・考える事が出来る」とが不思議なくらいだ。

もう、とにかく僕の頭はおかしくなつていても不思議ではないのに。

僕は、生きているのか。  
死んで、いるのか

死  
？

## 死とは

僕の目の前にある「それ」のことか？

死ねば、僕の目の前にある「それ」のようになる。  
もう・・・親だとは思えない。

爛れ、腐り、骨になり、その骨すらも鼠にかじられ、死体とも呼べ  
ぬ姿となっている。

これは、人なのか？  
人が、これなのか？

そもそも

人とは、何だ？  
死とは、何だ？

もしも人がこれならば、どこまでが人だったのだ？

粉々になつた今でも、これは僕の親なのか？

いつたい、どれが、ひとで、どれが、おやで、どれが、ほねで、ど  
れが、ぼくで、どれが、ねずみで、どれが、ぼくで、どれが、やみ  
なのだ。

いつたい、どこまでが、僕の親だったノだ

らう？

爛れたとき  
腐ったとき

それは、僕の親だったか？

骨になったとき

碎かれたとき

それは、人だったか？

少なくとも、

何も知らない者が、「それ」を見たとき、間違いなく人だとは判断しないだろう。

ならば

どこで

何で

僕らはそれを人と判断し

親と判断していたのだろうか。

いつもここで・・・・・何もかも分からなくなる。

分からなくなり、何もかもどうでもよくなると、自嘲ともともつかぬ、胸が締め付けられるようなビックリしないでない嗤いが体の内側からこみ上げてくる。

僕はもう、狂つてしまつたノかもしれない

そのとおり、  
ざつ、と人の足音のような物音が聞こえた。

人の、気配がある。

聞き慣れぬ、足音だ

あいつじゃない。

この足音は・・・・・僕をここに閉じ込めたあいつのものではない。

あいつであれば、足音で分かる。

ここに閉じ込められてから、耳に入る音と言えば、鼠が骨をかじる音と、あいつの足音だけである。

その足音を聞き間違えるはずもない。

ならば

なんだ

だれ、だ

もう、頭を持ち上げ、相手を見ることも出来ない。

さういふと、足音の主は僕の前に止まつた。

「 」を問おう

足音の主が、何かを言つた。

・・・・・まだ幼さの残る、女の・・・声だ。

ぐ、聞こえない。

問ひ・・・

何を?

「 汝の願いを問おう」

願い事?

願いじと?

今更・・・

こんな僕に今更、何を願えと云つのだ?

お前は・・・・・誰だ?

「汝の願いを、一つだけ叶えよう

「…………なぜ

「それが、私の役目だからだ

ぼつ、とする。

何も、考えられない。

願い」と……。

ねがい、ごと?

僕の、願いは、何だ

今更この洞穴を抜け出ようと思わぬ

抜け出ても、つまらぬ現実を突きつけられるだけだ

もつこのまま朽ち果ててゆくのが僕の望みだ

…………ただ、

唯一・・・・・心残りと云えば

おまえは

「私には、お前の願いを叶える力がある  
」

× × × × ×

僕をこのよくな目に遭わせたあの狐を

僕を

狐

お前は

「 お前は、誰だ？」

「わたしは」

荒涼神だ

声の主は短くそう答えた。

荒涼神？

神？

神か。

へやひや

みづべ

へむづく

神が、現れた。

どれだけ祈ったことか  
どれだけ願ったことか  
どれだけ拝したことか

「神よ」

僕はすがりつくなつにして、神に願いを乞つた。

「力を」

あの、

あの、狐を殺す

「力を、くれ

声の主はゆっくりと僕の顔を、小さな手で覆った  
一瞬だけ、その声の主の顔が見えた。

まだ幼く、あどけなさが残る。

人形のような、娘だった。

第十四話 子、若し在らば、即ち人を救い得たらん（前書き）

無無無。

## 第十四話 子、若し在らば、即ち人を救い得たらん

この世は理よつて均等が保たれている。

人の思いによつて生まれた 神

方千

靈元

その神によつて崩れた均等を保とうとして生まれたもの

荒涼神

十年前の、荒涼神  
そして、

僕。

「 さう言えば、憂はまだ知らなかつたな

唐突に、華梁がそう言つた。

「 何をだ？」

「 あの子供の名前だよ」

「 名前？」

暗い森を、一心不乱に走つてゐる

僕らは方千と別れ、あの子供の閉じ込められている洞穴へ向かつていた。

驚いたことに、白々と明け始めたと思っていた空は、方千の庵の外へ出た途端、夜のそれに変わっていた。どうやらあの庵の中では、外とは違つた時間が流れていったようだ。

まだ あの子供を助ける事が出来るかもしれない

そんな 傷い、希望のような思いを胸に抱きながら、僕らは暗い森をかけていた。

「 あの子の名前は夜季よすだ」

華梁が、そう言つた。

「 なぜ、知つてゐる？」

「…………一年前のあのときからだ、夜季に式神をつけて、それとなく調べて様子を見てたのさ」

暗い森の中、華梁の声だけが透き通るよつに聞こえてくる。

式神

華梁は多少、呪術を使える。

式神というのは、華梁の使い魔の様なものである。

「だが、少し前から…………ふつりと夜季は姿を消した。それも、式神で探し出せないくらいに完全に消息を絶つたんだ。おそらく、何かの結界だろうとは思つたが…………私も、術は専門ではないからな、手の出しそうが無かつたんだ…………それからはどう探しても夜季を見つける事が出来なかつたのだが…………今日、お前の前に現れた事でようやく場所は特定することが出来た。」

それが

あの、洞穴か。

「洞穴には三重の結界がはられていたよ。単純に洞穴に入れなくなる結界と…………洞穴の事を「見つける事が出来なくなる」結界。そして洞穴のことを誰も「気にかけなくなる」結界だ。それも…………どれも強力な。あれだけの結界がはれるのは今のところ、方千と靈元…………それくらいだろうな」

しへじつた、と華梁は悔しかつてひつぶやいた。

「靈元の……」

「ん？」

「靈元の目的は何だ？」

荒涼神を生み出す。

それだけにしては……何か……何か腑に落ちないものがある。

行動が……矛盾しているのだ。

「靈元の目的は明白だ。「荒涼神」を自らの手で生み出す」ことだろう。おそらく靈元も、お前が荒涼神だと知っている……いや、違うな。もしかすると、むしろお前を荒涼神にしたのは、靈元自身かもしれない」

「……な、」

「お前、以前に靈元と会つたことがあるかもしないと、話してくれたことがあつただる」

「ああ」

たしかに靈元の顔は……始めて会つたときから、見覚えがある気がした。

しかし、僕はそのときの記憶を、どうして思い出すことが出来ない。

「靈元なうば、記憶を操るくらいなことは容易いからな。お前の頭から自分自身がやったことの記憶を消したのだろう。術の方法を知れば、それを解く方法も見つけやすくなるし、靈元の記憶がない方が、お前自身に警戒が無くなり都合がいい。だから記憶を消し去った方が良かったのだろう」

「しかし、俺が荒涼神なのであれば、田標は俺であるはずだ。なぜわざわざ夜季を閉じ込める必要がある。」

「それは、お前がまだ完全な「荒涼神」になつていなかう？」

「いや、俺に消されるのが目的なうば、靈元自身が俺の前に現れるのがもつとも手つ取り早い。世に「かかわること」と、荒涼神である俺に「かかわること」、それが同時に出来るわけだからな。・・・・・なぜわざわざ夜季を使い、一年という時を待ち、間接的に俺を攻撃させるんだ？」

荒涼神を生み出すのが目的であれば・・・・・簡単だ。靈元自身が世にかかわればいい。理は神の異質から、「世の中の均等」を保つため、荒涼神を生み出し易い環境を作る。

僕が、生み出される「荒涼神」の一番の候補だ。覚醒すれば靈元の存在を消す事が出来る「もの」となれる。

そして、それが靈元の目的のはず。

が、

靈元の行動はまるで真逆である。

自分からかかわらうとせず、「夜季」という間接的な存在を使い、まるで自分からは手を出さぬようこじてこるかのようだ。靈元自身は表だって動いてはいない。

目的と行動が、矛盾しているのだ。

まるで

心のどこかで、僕にかかる」と恐れてこるよのうかのようだ。

ふむ、と華梁が走りながら考えこむよのうな仕草をする

僕が、気にかかってこることせ、それだけではない。

おわりく、華梁も気づいていないだらうと思つ。

庵を出た時から、ずっと坂になつてこることがあった。

それは、

方千が、最後に言った言葉だ。

庵を出ると、方千がぽつりと独り言のように呟いた、あの言葉。

おそれく、誰にも聞こえることの無くなる小さな声であった、が、獣のように発達した僕の耳は皮肉にもその声を拾っていたのだ。

おそれく、方千自身もそれを言ったことに気づいていないだろ、そのほど、その声は小さく、か細く、弱々しく、それでも、切に、心からそれを願っているような、確信と願いのこもった言葉。おそれく、その言葉は方千の本音であったのだ。

方千は、

方千は

靈元を、救ってくれ、と

確かにやついたのだ。

華梁には聞こえていなかつた様だが、僕の耳には確かにやつ聞こえた。

なぜ、  
方千は  
夜季ではなく、

靈元の救いを、願つたのだろうか？

「靈元は」

方千は

何を、考へてゐるのだろうか？

華梁は少し考へ込むよつて首をひねつてみると

「ふむ、なるほど」

一人で得心したよつて、うなずいた。

「・・・・・なにか分かつたのか？」

「目的変更だ。憂」

「は？」

靈元を救うことが、出来るかもしけん

そう、華梁が言った。

「…………え？」

靈元を、

救う？

「本当か？」

「…………私の憶測が間違つていなければ、だがな。」

「憶測？ どうこう」とだ？」

華梁には、

華梁には、何か分かったのか？

「説明は後だ」

ぴしゃりと華梁が言い放つた。

「まずは、夜季を助ける。話はそれからだろ？」

「…………ああ」

森を抜ける。

と。

そこには 見慣れぬ風景が広がっていた。

「なん、だ？」

元、洞穴のあつた谷は、まるで巨大な手のひらに引きちぎられたか  
のよう、大きく抉れていた。

一年前にあつた洞穴は影も形もない。

なにが、あつた？

「華梁……洞穴はどこだ？」

「……」

華梁が顔をゆがめる。

そして、眺めるように辺りを見回し、ある方向に視線を向けたとき・  
・・・・・

急に、ぴたりと華梁の動きが止まった。

「華梁、どうした？」

「・・・・・・・」

じい、と、視線の先を凝視している。

そして、

「　　遅かつた、か」

静かに　心からくる絶望を隠しきれないような声で、そつそつぶやいた。

華梁の視線の先を見る、

円形に抉れた場所のちよつと中心

そこには

そこには

黒く、つじめく影が、ぽつりと立っていた

## 第十五話 混沌

ざわ と全身の毛が逆立つ。

なんだ・・・・・あれは?

人?

いや

生き物なのかすら分からぬ。ただの黒い固まりである。

全身が影のように真っ黒だ。

田をじらす

なんだ、あれは

かすかに人の形をしているような気がする。

つかみどころのないゆらゆらとした影、だが、確かに手足がある、  
そして、頭も。

その・・・・・顔に当たる部分の半分が、白い、體體の様な仮面  
で覆われている。

人・・・・・か?

いやいや

あれは  
人じやない。

人にしては禍々しそう

あまりにも・・・・・人とかけ離れ過ぎていて

なんだあれば?

なんだあれば  
なんだあれば  
なんだあれば  
なんだあれば  
まずい  
まずい  
まずい  
まずい  
にげる  
にげる  
にげる  
にげる

僕の本能が、直感が、先ほどからいたむかで立派になっていた。

「…………」

理性が、その僕の逃げようとする本能を、からついて押されてくる

そのとおり、

ぐこつと、華梁に腕を捕まれた。

「…………華梁？」

「…………憂」

僕の気持ちを代弁したかのよつて、華梁がそつとつた。

しかし

しかし、夜季が

「夜季は…………」

「…………」

「お一一華梁」

「頼む」

「な・・・・・・・!?

「ここは、私に従ってくれ」

۱۱۷

華梁に無理矢理腕を引いて張られる

そのとき

甲高く夜の闇を引き裂くよつて「それ」咆哮した。

思わずひれ伏してしまいそうな、禍々しくも神々しい叫びだった。

およそ人の叫びではない、

獣の叫び声ですら無い。

人とも

獣ともつかぬ 「なにか

あれは

あれは

そのとおり。

その黒い者が僕の方を見て

にたり、と騒つた気がした。

そして、僕に向かって

心の底からうれしそうに 言つた。

「 みいいつけた。」

その瞬間に直感する。

「あれは

あれば

夜季、  
だ。

第十六話 千手（龍書卷）

スルモレタリ。

黒く

黒く

ただ黒く

闇と、見まじつほどの「何か」

人の形をしているが、確かにそれは闇だった。

とらえどころのない、闇だった。

ただの、黒き、混沌だった

そして、

その混沌に

自我が芽生える

疑問が芽生える

そして、

その疑問を解いて思考が芽生える。

間の

## 混沌の

始めの、疑問はこうだつた。

「死とは何だ」

そう、問うた。

何度も自分に問いかけた。

何度も自分に問いかけた。

一生とは何だ

次の疑問はこうだつた。

闇は氣づく。

理解ない  
わから

わから  
ない

いくら考へても答えでない、疑問をひたすら思考する。

ぶつぶつ ぶつぶつと繰り返す

そんな疑問を繰り返す。

自分が追っていた物の存在を。

わしぬ、だ。

「わしぬわしぬわしぬわしぬわしぬわしぬわしぬ」

闇は、やがてやがてながら、みすからいの手を見つめる

黒色手のひら

いつの頃かその闇は、  
思い込みで、自分を律しておつとめていた。

「」の手は父の手

おとうさんの手

たのもしこ手

なんでもできるおおきな手

「」の顔は母の顔

おかあさんの顔

削り取られ骨となつたお母さん顔

やせっこ、おかあさんのかお

だから

いつもおかあさんがあつてくれていい

あんしんできる

みまもりてくれる

だから、

ぼくは、不安にならない。

これからおつかれさまであります

おかあさんとこつしょなら

こわくない

れあ、はじめるよつ

闇に、

欲望が、芽生えた。

闇は、この世を思い通りにしたいと、やつかった。

きつねを、殺したいと、やつかった。

てよ

て

て

て

て

おとうさんのてよ

僕に、力をかして。

その、手のひらを、狐へ向ける

てよ

僕の無数の想いとなり

きつねをとりえろ

僕の、おもいをかなえよ。

その瞬間、夜季の体から無数の手が生える

背中から

肩から

十

百

そんな数は、ゆうに超える

千

千の手のひら

無数の、黒き手のひらが、夜季の背から肩から、幾数の腕とともに、  
生える。

自分の思い通りにするために

きつねを殺すために

それは、~~まじ~~う事なき自我だった。

搖る~~ゆる~~ゆるのない欲望だった

完全なる思考だった。

そして、きつねは思考する。

きつねの存在と、みずから~~の~~の存在の答えを出~~だ~~す~~だ~~う。 答えの出ぬ問いと、無理に答えを出~~だ~~す~~だ~~うとする。 自分の見解で、この世の答えを出~~だ~~す~~だ~~うとする。

きみは生まれ生きているだけで罪だ

きみは罪と向~~むか~~つことが必要だ

僕は

君に、罪を~~下~~る事を許された存在。

わあ、

いくよ

きつね

きみは、自分と、  
闇は、自分と

どへ、向かへりへ。

## 第十七話 欲望（前書き）

### 千手觀音

日本語では「十一面千手觀音」、「千手千眼觀音」、「十一面千手千眼觀音」、「千手千臂觀音」などさまざまな呼び方がある。「千手千眼」の名は、千本の手のそれぞれの掌に一眼をもつとされることから来ている。千本の手は、どのような衆生をも漏らさず救済しようととする、觀音の慈悲と力の広大さを表している。

## 第十七話 欲望

黒い、人型の闇から、幾本もの腕が生えてゆく。

「あれは、混沌 じんとん だな」

華梁がぽつりとそう言つた。

混沌。

全てが混ざり合つたもの。

天と地、万物の諸々のものがまだ分かれていかつた頃の、全ての始まりの状態。

形の無いもの。

何ものでもなく、何ものもあるもの。

以前、華梁から混沌についての話を聞いた事がある。

混沌っていうのは、全ての 何もなかつた頃の、始まりの状態だ。私達は始め、混沌とした世界から生まれ落ちたんだよ。そこから色々な因果があつて、今のこの世界が生まれたんだ。

そう言つていた気がする。

しかし、

混沌ならば、姿がないはずだ

僕がそう聞くと、華梁は軽く首を振った。

「意思を持てば話は別だ。混沌が意思を持ち、目的をもひ、自我を持つば、己の姿を自在に変える事が出来る。あの姿は、夜季が望んだ姿なのだろう?」

華梁が言つた。

## 夜季の望んだ姿？

幾本の手。白骨の顔。

あれが、  
夜季の望んだ姿なのか？

## 夜季が望むこと

考  
え  
る  
ま  
で  
も  
な  
い。

僕を、殺すことだ

夜季が噛う。

その黒いに覆い被さるよしに、白骨の歯がかちかちと音をたてる。

かちかちかちかちかちかちかち

止めどなく、夜季の囁いが辺りに響き渡つた。

今まで、これほどまでに楽しそうに、これほどまでに悲しそうに、これまでに救えない嘆いは聞いたことがない。

四

ねかしや「壁」

望みの姿になれたからだろうか。

小気味よく噛う。

仕合せになれたからだろうか。

仕合わせやうに踊つてゐる。

幸福に、なれたからだろうか。

だから、そんなに愉快なのか

だから、そんなに楽しいのか

だから、そんなに嬉しいのか

でも、夜季。

それが、望みだつたのか？

それがお前の幸福か？

それがお前の仕合わせか？

それがお前の救済か？

それがお前の安楽か？

問わずにはいられなかつた。

「なあ、夜季」

おまえは

「お前は、それでよかつたのか？」

そんな

そんな姿が、人の望みなのかと

そんな姿が、人の幸福なのかと

そんなものが人の仕合させなのかと。

そんなものが、人の幸福になれる真理なのか、と。

ぴたり、と、混沌の騒いが止まった。

「足りない」

混沌はそうつぶやいた。

「まだ、足りない」

再び、言つ。

「まだ?」

「まだ、足りないんだ」  
「まだ、足りないんだ」

「まだ、足りないんだ」

悲しそうひぶやへ。

そして、火が鳴こ、だだきこむるよひ風つた。

「お前を殺したいな

夜季がやひ風つと、

その壁みに答へるよひ風、

手が、増えた。

「お父さんとお母さんがあせこな

手が増える

「友達がほしいな

手が増える

「色んなことして遊びたいな」

手が増える

「色んな物がほしいな」

手が増える

「おいしいものも食べたいな」

手が増える

「お金も沢山ほしいな」

手が増える

「みんなから尊敬されたいな」

手が増える

混沌が何かを言つたびに、一つずつ手が生えてゆく。

「足りないんだ。仕合せになるにまだ足りない

手が増える

「たりない、たりない、たりない、たりない、たりない

ぶつぶつ、ぶつぶつ、ぶつぶつ

つぶやくたびに、手が増えてゆく  
まるで、夜季の望みをかなえる為に、欲の数に応じて手が生えて  
いるかのようだ。

「そうだ

思ついたよつて夜季が言つた

「一つずつかなえてこいつ

幼子のみづみづ

「僕には、その力がある」

そうだそつだそつだ。

かんたん、かんたん、かんたん。

嬉しそうにけたけた、と囁いて、じちらに顔を向けた。

まずはお前からだ。

そう、言つた気がした。

「しね

その瞬間

千の手が、僕に向かい、一斉に襲いかかつた。

第十八話 クロイソラ（前書き）

閑話

## 第十八話 クロイソラ

黒く、禍々しい手が、僕に追い被さるみじて夜空を覆つた必死の思いでその手を払いのけようとするも、幾本の腕は際限なく僕を襲つ。

腕を

脚を

顔を

胴を

黒い腕に縛め上げられ、たちまち身動きがとれなくなつた。

「 はなせ・・・・・ 離せよ・・・・・ 」

僕のその声も空しくかき消え、僕の体は暗闇と同化してゆく。黒い腕の固まりが一体となり、僕の体を貫く。

貫かれた場所から

その黒いものの感情が、洪水のように僕の心に流れ込んできた。

憎悪  
憂い

「 かはつ・・・・・ 」

なんだ、これ

これが、夜季のこころ

身を焼くような憎しみ 否それよりも

これは

自分自身の心を呪つた悲しみ か？

最後に見た光景は、僕の視界にある、夜空にぼっかりと浮かんだ白い月を、禍々しい黒き腕に浸食されている光景だった。

あがこつとするも、無数のうでが僕の手足をつかみ、身動きがとれない。

うでが、僕の胸を貫いてゆく。

血ひの胸を貫かれていたのに、僕の頭の中はひびく冷静だった。

その光景は、ゆつぐりと、まるで走馬燈のよつこ、僕の目の前にひろがつている。ひろがつている、といつ表現は、いまの僕の心境をよく表している。

まさこ、ひろがつていたのだ。

心地よいぐらいに、己の胸がえぐられる瞬間のその光景が、世界の全てに見えた。

僕にはいま、何もかも見えている。手足を拘束された諦めの為か、

僕の神経は、僕の目に瞳に、全て集まり、自らが貫かれるその光景を、まるで娯楽の為に作られた演劇をおもしろおかしく凝視するよう、客観的に、他人事のよう、己の死の瞬間を見つめていた。

ざまあみろ

始めて浮かんだ言葉がそれだった。

それはまるで悪事を働いていた敵役が、主人公との死闘の末、あっけなく殺される瞬間を見つめているような心境だった。

敵役

僕のことだ。

もしも、僕の生き様を演劇にするのであれば、間違い無く、僕は主人公の敵役だ。

村人を殺し残虐非道を繰り返した化け物。

これほど敵役に徹した役柄は、そうはない。

僕は、悪だ。

どんな人の目から見ても、僕の行為は紛れもない、悪なんだ。

悪は、裁かれる。

たつた今、僕は、自らの罪を裁かれている。

夜季の親を殺したから、代わりに夜季に殺される。

当然の運命だ。

演劇にもならないような、じつに当たり前の理だ。

じつして悪は滅びていく。

悪は滅びて世界は良くなっていく。

僕が死んで夜季が仕合わせになる。

悪

悪。

悪って、何なのだろう?

みんな、必死に生きてるだけじゃないか。

なぜそれに、分別をつくるのだろう?

僕だつて。

普通の人になりたかった。

みんなと遊びたかった

母に甘えたかった

父に甘えたかつた

成りたいものもあつたんだ

やりたいこともあつたんだ。

でも、

みんな、それを許してくれなかつた。

境遇がそれを許してくれなかつた。

この顔のせいで、それを許してくれなかつたんだ。

僕だつて

僕だつて

仕合わせに、なりたかつたのに。

「憂！」

ダレカノサケビゴエガキコエル

ほくにも、しあわせになる、しかくはある。

そうだ

そうですよね

れせんせん

かりよ・・・う

「その手を

## 第十九話 Pessimism（前書き）

地上の人の世に生まれず、きらめく日の光を見ず、

それこそすべてに勝りてよきことなり。

されど、生まれしからにはいち早く死の神の門に至るが  
次善なり

詩人

テオグニス

## 第十九話 Pessimism

禍々しく、黒く混沌とした手の中から、ビの手よりも強い力で僕の身体を引く腕があった。

やさしくて、温かい手腕。

これは

華梁の、手だ。

「お前は仕合わせになる資格がある」

そして、今度は「黒い物」に向かって

「もちろんお前にもだ、夜季」

そう、言った。

ざわりと、黒き腕が波打つ。

「・・・・・ナにを当たり前の」と云つてゐるの? ボくはそれを知つてゐるからこうして「

「いや、知らないな」

「ナ・・・・・」

「こぐら千の手の力を持つとも、そのようなやりかたで仕合わせ

になどなれるものか」

「……………・『うるさい』、『うるせー』」

「力は、力だ。求めれば力を使い手に入る事も多いだろう、だがな　それだけでは求める心を無くすことはできないんだ」

「求める・・・・」  
「？」

「お前の手がいくら多かるうが、月をつかむ事は出来ん、星をつかむ事はできん、日の光をつかむ事は出来ん、空を手に入れる事は出来ん、宇宙を我が物にすることなど出来ん、

求めるにころを満たして得る喜びなど、一時の満足にしかならない。欲しいと思つお前の心が、「たつた今このとき」を満足出来ないお前の心が

お前を仕合ひせかひ離あけてこる。

それを満たし続けた所で、欲しいと思うこのを更に強くするだけだ」

それを聞くと、黒い物は、心の底から嘲笑したように・・・・・  
・・わらいだした

「お前ハナニも分かつてない」

地から響き渡るような、恨みに満ちた声を出す。

「だから、僕を救えなかつた」

黒い物は、僕をつかんでいた 幾千の腕を一斉に放し

月明かりを遮るように、腕を天へとのばした。

そして

その腕を一斉に華梁へと向けた。

標的を、華梁へと変える。

「おイ、偽善者」

ぎり、と、全ての黒い腕に力を込める。

「お前ハ、本当に苦しんでいル人の心情を理解していない」

闇夜を覆い隠すほどの幾千の腕が肥大する。

「本当に苦しんでいた人は、常に助けを求めてる」

「たとえお前が言ったことが真実で、更に苦しま結果を招くわ  
とも」

今の苦しみを少しでも無くせるのなら

平気でそれにすがってやるわ

## 第一十話 開い

「 それで、やがて苦じむのか?」

華梁は そり、囁つた。

「 今よりも、今よりも、今よりも  
やがて今よりも他に求めて」

「 その手は、お前の欲の数だけ増えてゆく

「 今を満足しないまま

「 かまわなイ」

夜季が、闇が、混沌が、

そう断じて言つ。

「 今

今の苦しみよりもマシなれば

僕は、それでよいのだ

「なうば、今とはなんだ？」

華梁が問い合わせる。

「いま？」

夜季の体が、腕が、じわりとざわめく。

じり、と華梁が夜季の方へ歩を進めた。

「求め続けている、それがお前の今、だ」

「渴仰している、それがお前の今、だ」

「それが死ぬまで続く

「命が死きて、朽ち果てるまで続く

「全じが無くなつて、ひとつまつくなるまで、そのままだ

「置つて、夜季

「今のお前は、本当に満ち切つてこらるが？」

「お前は、永遠にそのままなのだ」

「例え」の世を食らおうと

「例え」の世を食らおうと

「例え」の世を食らおうと

「例え」の世の全じがお前の手の内に入らうと、今に満足しなれば、満ち足つてこらる事を知らなければ………その渴仰する気持ちは無くならなつのだぞ？」

「嘘ダ」

「嘘なものか

「今、とは永遠だ」

「永遠に今が続いているだけだ」

「永遠とは、「今」の連續なんだよ、夜季」

「その今に満足出来なければ」

お前の渴仰は永遠に 乾くことはない。

「それでも此一のか、夜季？」

「嘘だ」

「嘘だ、嘘だ、嘘だ」

ぐらつ、と影が揺らいだ。

「何故、生きているのダ?」

僕は 私は

「ならバ人は」

「ならば」

悲鳴のよう」咆哮する。

! ! !

モウノ

うそ  
だ

嘘だ 嘘だ 嘘だ 嘘だ 嘘だ

頼りなく、闇夜に溶け込むよう弱々しく、女々しく

冷たい地面に倒れ込みそうになる。

そのとき

「どうした、夜季？」

闇夜に、困惑した靈元の声がひびいた。

「なぜ苦しむ？ 夜季よ」

「なぜ悲しむ？ 夜季よ」

優しく、ことおじへ、包み込むよう

靈元が影に向かって、語りかけている。

「おまえは、そのままでいいんだよ

」「嘘、そのようなものわかるな

「心から満足出来ぬまま、人の命を終えるのだよ」

「ならバ、

ならバ

なぜ人は生きている

ノだ ？」

悲鳴のよに 夜季の声が闇夜に響く。

「意味など有るわけがないだろ？？」

「生まれたから、生きる」

「それだけなのだよ、夜季」

「靈元が 、強く、そう言ひはなつた。

「私は、その答えを知るために八百年生きた

「人からは神とも崇められたこともあった

」

それでも

「分からなかつたのだ」

生きる意味も

生きる意義も

生きる目的も

「私には 、何一つ分からなかつたのだ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0786g/>

---

閻路妖狐

2012年1月5日22時50分発行